

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

矢加部南屋敷遺跡 矢加部五反田遺跡

福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査

2009

福岡県教育委員会

序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局の委託を受けて、有明海沿岸道路大川バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本書は平成17・18年度に発掘調査を実施した柳川市大字矢加部字南屋敷及び字五反田に所在する矢加部南屋敷遺跡第1・2次調査及び矢加部五反田遺跡の記録です。

本遺跡からは中世後期の集落や墓地を中心に様々な遺構が見つかり、地域の文化を知るうえで貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財愛護思想の普及及び学術研究・生涯学習への一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書の作成にあたりましては、関係諸機関や地元をはじめとする多くの方々に御協力・御助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

平成21年3月31日

福岡県教育委員会教育長
森山 良一

例言

- 1 本書は、有明海沿岸道路大川バイパス建設工事に伴って発掘調査を実施した福岡県柳川市大字矢加部に所在する遺跡の報告である。
- 2 発掘調査・報告書作成は、国土交通省九州地方整備局の委託を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。なお、調査・報告書作成に関して有明海沿岸道路出張所、柳川市教育委員会の多大な御協力を得た。
- 3 出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館で行った。
- 4 掲載した図は、遺構を進村真之が、遺物を平田春美・田中典子・久富美智子・坂田順子・堀江圭子・棚町陽子・中村洋子・栗林明美・中川真理子が作成したものを豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
- 5 掲載した写真は遺構を進村が、遺物は北岡伸一が撮影した。
- 6 使用した方位は座標北である。
- 7 本書の執筆・編集は進村が行った。

目次

序	
例言	
I はじめに	1
1 調査の経過	1
2 調査の組織	4
II 遺跡の地理・歴史的環境	6
III 発掘調査の記録	10
矢加部南屋敷遺跡	10
(1) 掘立柱建物	10
(2) 木棺墓	12
(3) 土坑墓	12
(4) 土坑	12
(5) 溝	18
(6) ビット出土土器	42
(7) 表採土器	42
(8) 出土石製品	45
(9) 出土特殊遺物	46
矢加部五反田遺跡	49
(1) 溝	49
(2) ビット出土土器	57
(3) 出土石製品	58
(4) 出土特殊遺物	58
IV まとめ	59

図版目次

図版 1	1 矢加部南屋敷遺跡遠景 (西から)	
	2 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
図版 2	1 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
	2 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
図版 3	1 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
	2 矢加部南屋敷遺跡遠景 (南東から)	
図版 4	1 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
	2 矢加部南屋敷遺跡遠景 (東から)	
図版 5	1 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
	2 矢加部南屋敷遺跡 (空中写真)	
図版 6	1 1号掘立柱建物 (南から)	2 1号木棺墓木棺検出状況 (東から)
	3 1号木棺墓 (東から)	

図版 7	1 1号土坑墓 (東から)	2 1号土坑 (南から)
	3 2号土坑 (南から)	
図版 8	1 4号土坑 (東から)	2 5号土坑 (南から)
	3 6号土坑 (北から)	
図版 9	1 7号土坑 (北から)	2 8号土坑 (東から)
	3 9号土坑 (東から)	
図版10	1 10号土坑 (北から)	2 11号土坑 (東から)
	3 ビット土製鈴検出状況 (東から)	
図版11	1 8号溝 (西から)	2 8号溝 (西から)
	3 11号溝炭化米検出状況 (西から)	
図版12	1 12号溝土層 (東から)	2 13号溝調査風景 (南から)
	3 13号溝土層 (北から)	
図版13	1 13号溝土層 (北から)	2 15号溝 (南東から)
	3 16号溝土層 (北から)	
図版14	1 16号溝土層 (南から)	2 16号溝土層 (南から)
	3 19号溝 (西から)	
図版15	1 遺跡全景 (東から)	2 遺跡全景 (南から)
	3 遺跡全景 (東から)	
図版16	1 ビット群 (南から)	2 ビット群 (南から)
	3 近くの堀 (北から)	
図版17	1号木棺墓、4号土坑出土土器	
図版18	4・9号土坑、2・4・8・11号溝出土土器	
図版19	12・13号溝出土土器	
図版20	13・15号溝出土土器	
図版21	15・16・19号溝出土土器	
図版22	19号溝出土土器	
図版23	19号溝、ビット、表採土器	
図版24	表採土器、出土石製品	
図版25	出土石製品、特殊遺物	
図版26	1 矢加部五反田遺跡遠景 (南から)	
	2 矢加部五反田遺跡遠景 (西から)	
図版27	1 矢加部五反田遺跡全景 (空中写真)	
	2 矢加部五反田遺跡調査終了後 (東から)	
図版28	1 1号溝土層 (南から)	2 2号溝土層 (南から)
	3 3号溝土層 (南から)	
図版29	1 4号溝土層 (北から)	2 ビット小皿出土状況 (南から)
	3 矢加部五反田遺跡調査終了後 (東から)	
図版30	1・2・3号溝出土土器	
図版31	3号溝、ビット、石製品、特殊遺物	

挿図目次

- 第1図 有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)
- 第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)
- 第3図 調査区配置図 (1/2,000)
- 第4図 矢加部南屋敷遺跡遺構配置図 (1/600)
- 第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)
- 第6図 1号木棺墓・1号土坑墓実測図 (1/20)
- 第7図 1号木棺墓出土遺物実測図 (1/3)
- 第8図 1～3・6・7号土坑実測図 (1/30)
- 第9図 4・5号土坑実測図 (4は1/60、5は1/30)
- 第10図 4号土坑出土土器実測図 (1/3)
- 第11図 8～11号土坑実測図 (1/30)
- 第12図 9号土坑出土土器実測図 (1/3)
- 第13図 1～13号溝土層実測図 (13は1/80、他は1/40)
- 第14図 1～3号溝出土土器実測図 (22は1/4、他は1/3)
- 第15図 4号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第16図 5・7号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第17図 8号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第18図 11号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第19図 12号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第20図 13号溝出土土器実測図① (1/3)
- 第21図 13号溝出土土器実測図② (1/3)
- 第22図 13号溝出土土器実測図③ (1/3)
- 第23図 13号溝出土土器実測図④ (52～56は1/4、他は1/3)
- 第24図 13号溝出土土器実測図⑤ (1/3)
- 第25図 13号溝出土土器実測図⑥ (1/3)
- 第26図 14～19号溝土層実測図 (16・19は1/80、他は1/40)
- 第27図 15号溝出土土器実測図 (1/3)
- 第28図 16号溝出土土器実測図① (1/3)
- 第29図 16号溝出土土器実測図② (1/3)
- 第30図 19号溝出土土器実測図① (1/3)
- 第31図 19号溝出土土器実測図② (1/3)
- 第32図 19号溝出土土器実測図③ (45・49～52は1/4、他は1/3)
- 第33図 ビット・表採土器実測図 (1/3)
- 第34図 出土石製品実測図① (1/4)
- 第35図 出土石製品実測図② (1/4)
- 第36図 出土石製品実測図③ (1/4)
- 第37図 出土石製品実測図④ (1/6)
- 第38図 出土特殊遺物実測図 (1～5は1/1、6～14は1/2、他は1/3)

第39図	矢加部五反田遺跡遺構配置図 (1/600)
第40図	1～4号溝土層実測図 (1/40)
第41図	1号溝出土土器実測図① (1/3)
第42図	1号溝出土土器実測図② (24は 1/4、他は 1/3)
第43図	2号溝出土土器実測図① (1/3)
第44図	2号溝出土土器実測図② (21は 1/4、他は 1/3)
第45図	3号溝出土土器実測図① (1/3)
第46図	3号溝出土土器実測図② (1/3)
第47図	4号溝出土土器実測図 (1/3)
第48図	ピット出土土器実測図 (1/3)
第49図	出土石製品実測図 (1/4)
第50図	出土特殊遺物実測図 (1・2は 1/1、他は 1/2)

表 目 次

第1表	国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要	3
第2表	矢加部南屋敷遺跡出土土器一覧表	61
第3表	矢加部五反田遺跡出土土器一覧表	69
第4表	矢加部南屋敷遺跡出土石製品一覧表	72
第5表	矢加部五反田遺跡出土石製品一覧表	72

I はじめに

1 調査の経過

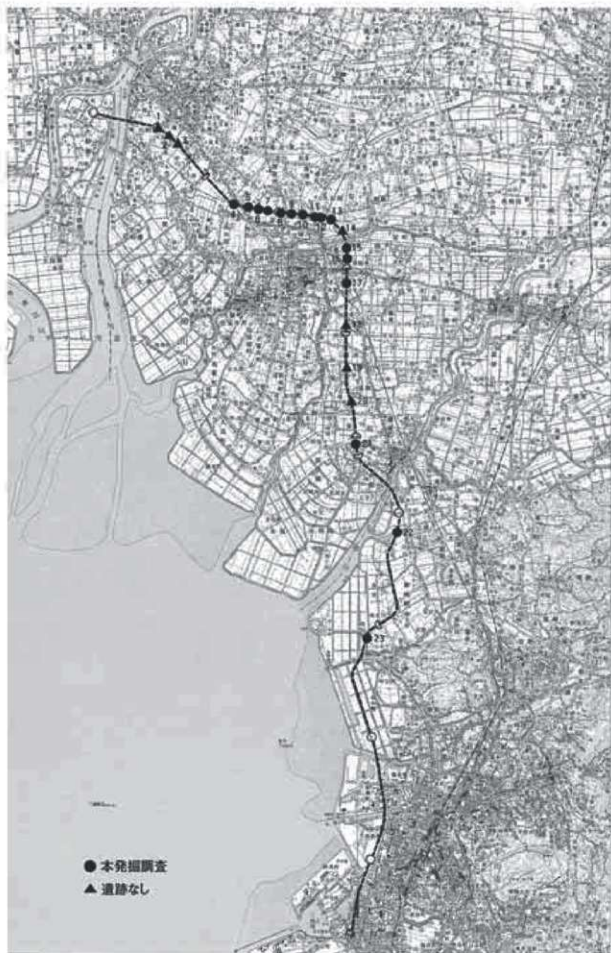
有明海沿岸道路は、福岡県大牟田市を起点とし、佐賀県鹿島市に至る延長約55kmの地域高規格道路である。三池港、佐賀空港などの広域交通拠点および大牟田市、柳川市、大川市、佐賀市、鹿島市など有明海沿岸の都市間を連結することにより、地域間の連携、交流促進を図るとともに、一般国道208号等の交通安全の確保を目的として計画された。福岡県内部分は延長約29kmで、大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの3事業が推進されている。このうち大川バイパスは柳川市徳益から大川市大野島までの延長10kmで、平成5（1993）年に事業化、平成12（2000）年度に延伸部分が事業化され、平成20（2008）年3月29日には矢部川付近を除き、ほぼ全線が共用されている。

福岡事務所より、大牟田高田道路、高田大和バイパス、大川バイパスの全路線について、平成12年11月16日付「一般国道208号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財分布調査について」で、照会があった。これに対し、平成13年2月19日付「一般国道208号有明海沿岸道路建設に伴う埋蔵文化財分布調査等について」で17地点に埋蔵文化財が存在する旨、またこれ以外にも文化財の存在が予定される地点について試掘、確認調査等、別途協議が必要な旨を回答している。以後、用地取得次第、随時協議を行い、試掘、確認調査を実施している。

今回報告する遺跡の所在する柳川市大字矢加部字南屋敷、字五反田については平成16年5月19日付で「埋蔵文化財の試掘調査の実施について」で、依頼を受け、平成16年6月8日に用地の取得が完了した大字矢加部での試掘調査を行い、大字矢加部106-1付近で埋蔵文化財の存在を確認し、平成16年7月1日付「埋蔵文化財の試掘調査の結果について」で回答した。これが矢加部南屋敷遺跡である。

翌平成17年3月4日に矢加部南屋敷遺跡の西側で確認調査を行い、西鉄天神大牟田線の線路際まで遺跡が広がることが確認された。また、新たに線路の西側でも試掘調査を行い、埋蔵文化財の存在を確認した。これが矢加部五反田遺跡の線路際部分である。この結果については、平成17年3月14日付「埋蔵文化財の試掘調査の実施について」で回答して、本調査が必要な旨を報告した。続いて、平成17年8月22日に矢加部五反田遺跡の東側部分について確認調査を行い、東側に遺跡が広がることを確認した。この確認調査の結果については、平成17年9月14日付「埋蔵文化財試掘調査の実施結果について」で、追加された部分についても本調査が必要な旨を回答した。

なお、この2遺跡については、西鉄天神大牟田線を跨ぐ橋梁を建設する工事に期間を要するとの事から、翌平成17年度当初からの調査となった。矢加部南屋敷遺跡については、工事の先行する北側の暫定共用部分から調査を行うこととなった。これが第1次調査の調査範囲である。



第1図 有明海沿岸道路調査地点位置図 (1/50,000)

第1表 国道208号有明海沿岸道路埋蔵文化財概要

地点	市町名	大字名 (区別)	遺跡名	H19.4.1 現在対象 面積 (㎡)	試掘調査		発掘調査		報告書作成		遺跡の概要						
					試掘年度	本誌調査 面積 (㎡)	調査 年度	面積 (㎡)	作成 年度	面積 (㎡)	報告書 番号	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
1	大川市		津(峠点- 岳道新田境 津断)	12,900	H18	0										試掘済み、遺跡無し	
2	大川市		津(岳道津 田境津断- 大字跡)	25,700	H14・15・ 18	0										試掘済み、遺跡無し	
3	大川市		幡保	15,400	H15-18	0										試掘済み、遺跡無し	
4	大川市		坂井	坂井長水	3,820	H17-18	0	H17	1,820	H19	3,020	鎌倉時代	土坑3基	鎌倉時代の土 器	・奈良の区画溝		
									H18	1,200							
5	柳川市		西蒲池	西蒲池古塚	14,200	H16	0	H16	4,390	H19	14,200	平安時代	土坑24基	各時代の土器	・奈良の区画溝		
									H17	9,460							
								H18	300			鎌倉時代	土坑1基		・墨書土器		
6	柳川市		西蒲池	西蒲池打墓坊	4,400	H16	0	H17	3,400	H19	3,400	古墳時代 奈良時代	土坑20基 溝2基	各時代の土器	・奈良の区画溝		
7	柳川市		西蒲池	西蒲池古溝	4,530	H16	0	H17	4,530	H19	4,530	平安時代	風呂遺構 溝1基	平安時代の土 器	・奈良の区画溝と堀 跡		
8	柳川市		西蒲池	西蒲池下墓	2,800	H16	0	H17	2,800	H19	2,800	平安時代	土坑1基 溝5基	土師器、黑色 土器	・奈良の区画溝		
9	柳川市		栗葉池	栗葉池横町	5,700	H14	0	H15	5,700	H16	5,700	大田 白内墓	古生時代 平安時代 鎌倉時代	土坑20基 溝2基	各時代の土器 石砌・石積	・中世の集落遺跡	
10	柳川市		栗葉池	栗葉池大内蔵り	1,200	H16	0	H17	1,200	H18	1,200	古墳時代 平安時代 鎌倉時代	土坑6基 溝3基	各時代の土 器・陶磁器	・中世の集落遺跡		
11	柳川市		矢加部	矢加部町屋敷	4,855	H15-16	0	H16	2,040	H17暫 定 H18 (H21 ~23)	1,500	江戸時代 明治時代	土坑50基 溝15基 甕10基 井口3基	各時代の土 器	・江戸時代の町屋跡 ・水田境の溝入り土 器	・筑前藩の構想と るつば・筒形 金属製品・セ ラミ製品	・大 津
								H17	430								
								H18	1,820								
								H19	565 (860)								
12	柳川市		矢加部	矢加部五反田	4,000	H17	0	H18	4,000	H20	4,000	戦国時代 江戸時代	土師器、瓦葺 土器	・戦国時代の集落遺 跡			
13	柳川市		矢加部	矢加部西原敷	10,470	H16	0	H17 H18	6,000 4,470	H20	10,470	戦国時代 江戸時代	竪立柱建物 跡1棟 土坑9基	土師器・瓦葺 土器 書簡・白磁・ 磁付	・戦国時代の集落遺 跡		
14	柳川市		三嶺町	三嶺町河河	4,700	H18	0									試掘済み、遺跡無し	
15	柳川市		三嶺町	三嶺町藤船 津	藤船津江頭	9,700	H16	0	H17	4,700	H20 (~22)	4,800	古生時代 古墳時代 古代・中 世	竪立柱建物 跡5棟以上 土坑49基 溝7基	各時代の土器 各時代の石製 品 瓦葺	・宮生-中世の複合 集落遺跡 ・宮生時代の末-古 墳時代の初期の 竪立柱建物の 柱の基礎) 等	・宮生-中世の複合 集落遺跡
									H18	3,300							
								H19	1700								
16	柳川市		三嶺町	三嶺町藤船 津	藤船津水町	4,500	H17	0	H19	4,500	(H22)	4,500	古生時代 鎌倉時代			・宮生-中世の複合 集落遺跡	
17	柳川市		三嶺町	三嶺町藤船 津	藤船津西ノ内	2,280	H16-18	0	H18	2,280	(H22)	2,280	戦国時代			・戦国時代の集落遺 跡	
18	柳川市		大和町	徳島		4,500	H17-18	0								試掘済み、遺跡無し	
19	柳川市		大和町	鳥居		25,000	H17-18	0								試掘済み、遺跡無し	
20	柳川市		大和町	塚塚	塚塚地蔵田	22,740	H17-19	0	H19	0 (250)			江戸時代			一部本調査必要(塚 塚地蔵田遺跡) 一部試掘済み、遺跡 無し	
21	柳川市		大和町	栗長本土原跡		64,500	H16-18	0			H20		江戸時代			・柳川古指定宅跡後 長本土原跡 試掘済み、遺跡無し	
22	高田町		黒崎岡	新築村田間記跡		-	0	H14 H19	- 移設作業	H20	-		江戸時代	記念碑基礎	なし	・敷居築工法(草など を柱敷を敷く工 法)	
23	高田町		黒崎岡	黒崎堤防		300	0	H16	300	H20	300		江戸時代	堤防基礎 遺跡	なし なし	・福岡県指定史跡旧 柳川藩干拓遺跡	

以下、調査の経過を日誌から抜粋する。

矢加部南屋敷遺跡

第1次調査

- 平成17年 7月19日(火) 重機による表土剥ぎ開始。
平成17年 7月25日(月) プレハブ搬入。
平成17年 7月26日(火) 機材搬入。地元区长へ挨拶。遺構検出作業開始。
平成17年 8月3日(水) 溝から青磁、白磁、明青花が出土。
平成17年 8月9日(火) 溝から土製鈴が出土。
平成17年 9月22日(木) 8号溝から墨書の天目茶碗が出土。空撮。
平成17年 10月12日(水) 空撮。
平成17年 10月26日(水) 13号溝から朝鮮通宝が出土。
平成17年 11月4日(金) 1号木棺墓掘削。
平成17年 11月25日(金) 空撮。
平成18年 2月2日(木) 機材撤収。
平成18年 2月13日(月) 埋め戻し終了。

第2次調査

- 平成18年 6月12日(月) 重機による表土剥ぎ開始。
平成18年 6月19日(月) 作業員による遺構検出、掘削作業開始。
平成18年 6月29日(木) 井戸検出、掘削。
平成18年 9月29日(金) プレハブ撤収。埋め戻し終了。

矢加部五反田遺跡

- 平成18年 5月15日(月) 重機による表土剥ぎ開始。地元への挨拶。
平成18年 5月18日(木) プレハブ搬入。
平成18年 5月24日(水) 遺構検出開始。南北溝4条検出。
平成18年 7月26日(水) 空撮。
平成18年 8月4日(金) 埋め戻し終了。

2 調査の組織

国土交通省九州地方整備局福岡工事事務所

	平成17年度	平成18年度	平成20年度
所長	増田 博行(～H17.8.1)	小口 浩(～H20.7.10)	小口 浩(H17.8.2～) 森山 誠二(H20.7.11～)
副所長	後田 徹 佐々木秀明	春田 義信 佐々木秀明	白川 逸喜 柴原 正純
建設監督官	松尾淳一郎 今村 隆浩	今村 隆浩 鶴林 保彦	山北 賢二 鶴林 保彦
調査第二課長	鈴木 昭人		
調査課長		鈴木 昭人	今里 英美

調査係長	松木 厚廣	松木 厚廣(～H18.9) 川原 一哲(H18.10～)	矢野 幸樹
専門員	相島 伸行	伊東 良二	伊東 良二
国土交通技官	柳瀬 純矢	谷川 勝	猿澤宗一郎
工務課長	堀 康雄	堀 康雄	清時 義雄
福岡県教育庁総務部文化財保護課	平成17年度	平成18年度	平成20年度
総括			
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	清水 圭輔	清水 圭輔	橋崎洋二郎
総務部長	中原 一憲	大島 和寛	荒巻 俊彦
副理事兼 文化財保護課長		磯村 幸男	磯村 幸男
文化財保護課長	久芳 昭文		
副課長	川述 昭人	佐々木隆彦	池邊 元明
参事兼 課長補佐		安川 正郷	
参事兼	木下 修	小池 史哲	小池 史哲
課長技術補佐			
課長補佐	安川 正郷	前原 俊史	
参事補佐兼 調査第二係長	飛野 博文	飛野 博文	飛野 博文
庶務			
管理係長	稲尾 茂	井手 優二	富永 育夫
事務主査	石橋 伸二	野中 顕	
主任主事	末竹 元	湖上 大輔	藤木 豊
	湖上 大輔	柏村 正央	近藤 一崇
		小宮 辰之	小宮 辰之
主事			野田 雅
調査・報告書作成			
主任技師	進村 真之	進村 真之	進村 真之
整理担当			
参事補佐			濱田 信也
主任技師	大庭 孝夫	大庭 孝夫	坂本 真一
	岡寺 未幾		

なお、発掘調査及び報告書作成に当たっては、地元の方々をはじめ、夏場の暑い日差しの中、冬の極寒の中で作業された発掘作業員の方々と福岡国道事務所、有明海沿岸道路出張所、柳川市教育委員会の関係者の皆様に感謝いたします。

II 遺跡の地理・歴史的環境

地理的環境

遺跡の所在する柳川市は、筑後平野の南西端に位置する。平成17年3月21日に山門郡三橋町、大和町と合併し、北は大川市、三潁郡大木町、筑後市、東はみやま市、西は佐賀県と境を接する。

周辺は筑後川及びその支流が運ぶ土砂が堆積してきた沖積地で、標高10m以下の極めて低い平地である。本遺跡は標高3m前後の更に低い場所に位置する。

歴史的環境

柳川市域に集落が営まれるようになるのは弥生時代以降である。大川市下林西田遺跡では前期の遺構が確認されている。弥生時代中期の遺跡として、近年、発掘調査の行われた柳川市三橋町に所在する磯島フケ遺跡がある。遺構密度の高い集落遺跡で、掘立柱建物、土坑、井戸、溝から土器、石器、木製品が出土している。弥生後期の遺跡としては、近年、本遺跡と同じく有明海沿岸道路関係で発掘調査の行われた蒲船津江頭遺跡がある。低湿地に礎板をもつ多くの掘立柱建物が調査されており、大規模な集落が営まれていたことが判明している。発掘調査は行われていないが、蒲池遺跡群は弥生時代の遺物の散布地として古くから知られており、多くの遺物が採集されている。また、三島神社を中心とする貝塚や支石墓と考えられる巨石も存在し、大規模な集落遺跡の存在が予想される。

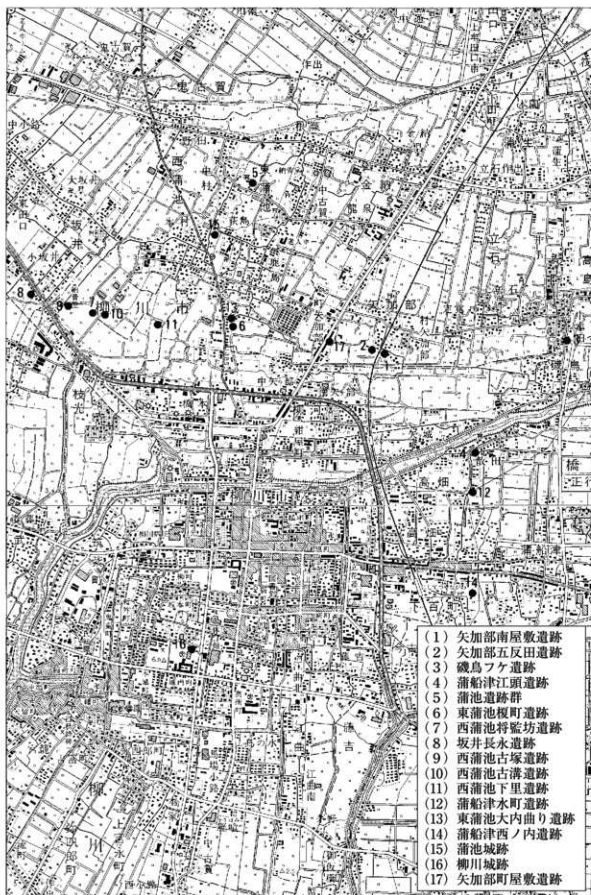
古墳時代～奈良時代の遺跡はほとんど明らかになっておらず、遺物が採集されている程度である。今回の有明海沿岸道路関連の東蒲池榎町遺跡、西蒲池将監坊遺跡で該当時期の遺構、遺物が検出されているが、密度も希薄で、不明瞭な点も多い。今後、発掘調査が増加すれば、しだいに明らかになってくるであろう。

平安時代の遺跡には、有明海沿岸道路で発掘調査の行われた坂井長永遺跡、西蒲池古塚遺跡、西蒲池古溝遺跡、西蒲池下里遺跡などがあげられる。いずれも、溝が検出されており、条里に関する遺構と考えられている。また、同じく有明海沿岸道路関係で調査の行われた蒲船津水町遺跡では、井戸等を検出しており、集落遺跡と考えられる。

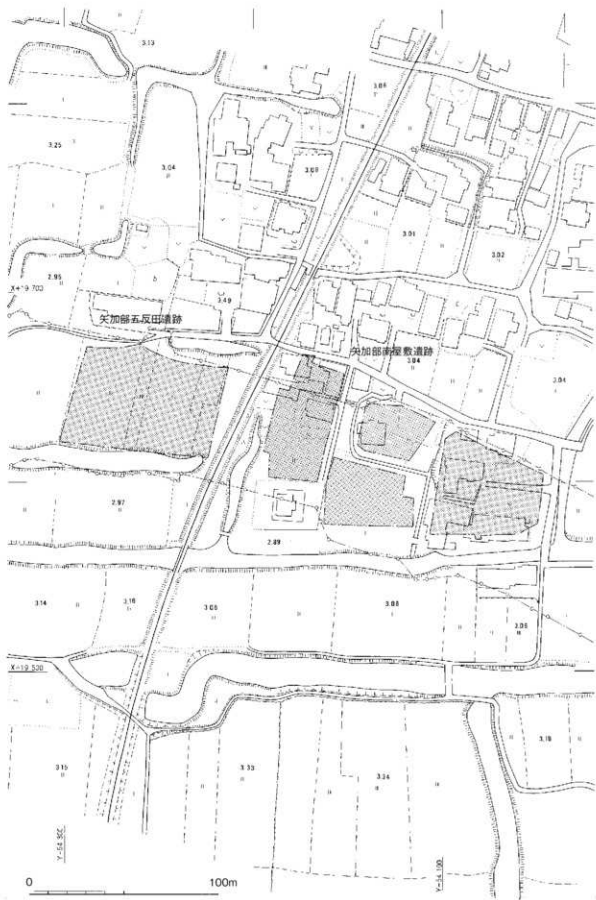
中世前期の遺跡としては、東蒲池大内曲り遺跡があげられる。掘立柱建物などが発見されており、集落遺跡と考えられている。中世後期の遺跡としては、蒲船津西ノ内遺跡があげられる。この遺跡は、有明海沿岸道路関係で発掘調査が、行われたほか、周辺の宅地整理事業に伴い、柳川市教育委員会が発掘調査を行っている。井戸、溝が検出されており集落遺跡と考えられる。

この地域に勢力を持ったのが、蒲池氏であり、その居城として蒲池城跡がある。この蒲池氏の支城として、柳川城が築かれる。戦国時代末期に蒲池氏が滅ぼされると蒲池城は廃城となり、柳川城には立花氏が入る。

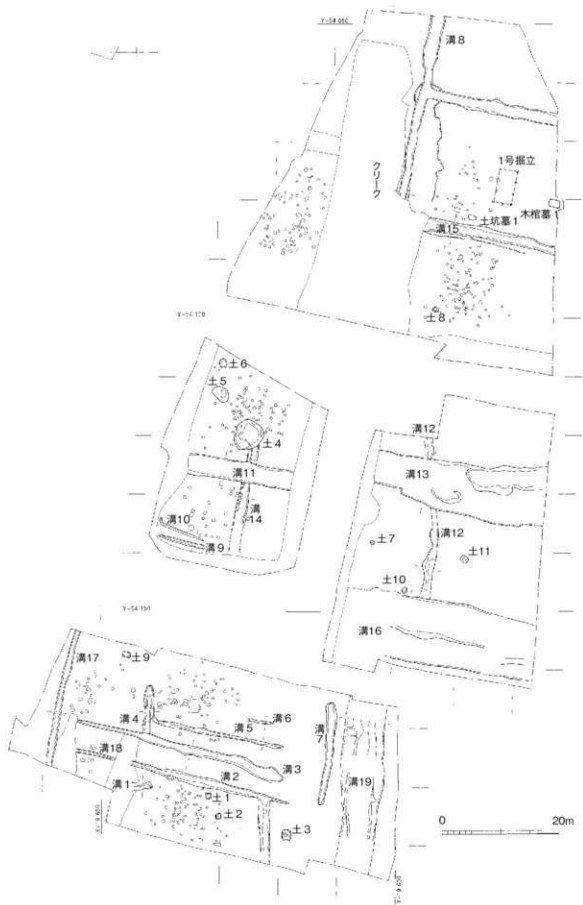
立花氏もやがて改易され、田中吉政がこの地域を支配するようになる。田中吉政は久留米から柳川までの道路整備を行った。この道が「田中道」と呼ばれる現在の県道23号久留米柳川線であり、この沿線沿いの町屋敷付近に広がるのが、近世の遺跡である矢加部町屋敷遺跡である。この遺跡からは近世の陶磁器が大量に発見されている。また、柳川城は、再び立花氏の居城として幕末まで使用されるが、現在では、一部の石垣を残すのみで、ほとんどが失われている。柳川城の城下町は、現在、市教育委員会により発掘調査が進められており、次第にその全容が明らかになるであろう。



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第3図 調査区配置図 (1/2000)



第4図 矢加部南屋敷遺跡遺構配置図 (1/600)

Ⅲ 発掘調査の記録

矢加部南屋敷遺跡

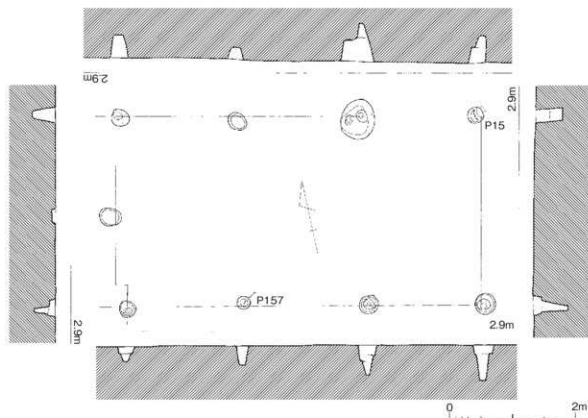
本遺跡は、柳川市の北部、標高約3.5mに位置する。西鉄天神大牟田線の蒲池駅と矢加部駅の間、線路の東側に展開する。周囲は大規模な沖積地で、一見高低差は認められないが、現在の集落が広がっている北側がわずかに高くなっている。遺跡本体も現在の集落がある北側に向かい展開していると考えられる。遺跡の現状は、水田であり、部分的に住宅地として利用されていた。この地域特有のクリークが縦横に掘られており、梅雨時は大量の水の流入により調査を阻まれることも、しばしばあった。

約30cmの耕土の下に約50cmの暗茶褐色土が堆積しており、その下層に淡茶褐色粘質土の遺構面が広がっていた。遺構の埋土は淡黒褐色に近いものが多く、検出は比較的容易であった。しかし、低湿な土地柄と粘質の埋土は遺構の掘削に多くの時間を費やされた。検出した遺構は掘立柱建物1棟、木棺墓1基、土坑墓1基、土坑11基、溝19条、ピット多数である。时期的には中世後期のものが圧倒的に多く、わずかに弥生土器や石庖丁が出土することから、周辺に弥生時代の遺跡が存在する可能性も考えられる。なお、現代のクリークと重複する溝で、安全性の問題等から掘削ができなかった遺構もある。

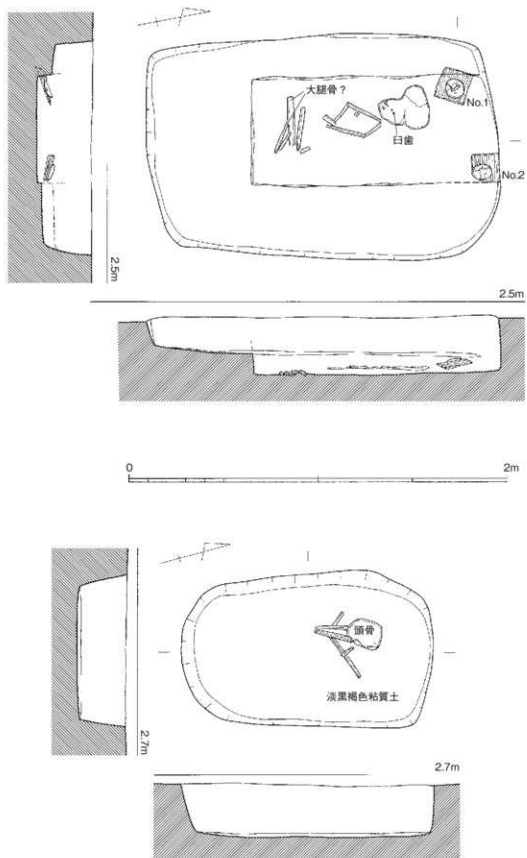
(1) 掘立柱建物

1号掘立柱建物 (図版6、第5図)

調査区の南西寄りで見出した。3間×2間の東西棟建物である。全体に柱穴自体大きいものではない。東側中央の柱穴は検出できなかったが、西側も浅いことから、削られてしまったものと判



第5図 1号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第6図 1号木棺墓・1号土坑墓実測図 (1/20)

断している。梁行30cm、桁行580cmを測る。柱間の距離は梁行で150cm、桁行で190cmである。主軸方位はN-78°-Wである。遺物は出土していない。

(2) 木棺墓

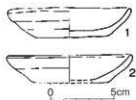
1号木棺墓 (図版6、第6図)

調査区の南東部で検出した。主軸方位はN-79°-Wである。平面プランは南北185cm、東西120cmの隅丸方

形の掘り方の内側に南北120cm、東西60cmの周囲に棺材を立てている状況で発見された。埋土は全体に淡黒褐色粘質土であった。現地表面から棺を検出した深さまで約20cmであり、薄く木の皮状になった棺材の残存している高さは約10cmであった。本来、棺の周囲をやや広めに掘り、棺材を立てた後、埋め戻したと考えるのが自然であるが、その痕跡を見つけることは出来なかった。また、棺の深さが10cmでは浅すぎるため、本来、掘り方の途中まであった棺材が何らかの理由で失われたものと判断している。棺内からは人骨1体分を検出したが、土圧により棺の底に貼りつくように扁平となり、さらに多湿のため極めてもろいため、取り上げは不可能な状態であった。北側に頭骨、南側に大腿骨と思われる骨が残っていた。棺の長さや骨の状況から成人の屈葬であると考えられる。頭部付近には長さ15cm四方の木板もしくは木皮の上に土師皿をのせたものが2組副葬されており、その一枚には刀子状の鉄器を入れていた。なお、この鉄器も極めてもろく、取り上げられなかった。

出土土器 (図版17、第7図)

1・2は土師質の小皿である。内外面の調整はナデである。磨滅しているが、底部は糸切りであろう。焼成は良好である。



第7図 1号木棺墓出土遺物実測図 (1/3)

(3) 土坑墓

1号土坑墓 (図版7、第6図)

調査区の南西寄りで検出した。主軸方位はN-75°-Wである。平面プランは南北135cm、東西80cm、楕円形の掘り込みで、深さは現存で25cm程である。埋土は淡黒褐色粘質土である。埋土上位から人骨1体分を検出したが、当初、土坑墓であることを認識せず、南側を半截して掘削したために人骨の下半分も掘り上げてしまった。北側に頭骨を検出している。人骨は湿度のため、非常にもろくなっており、取り上げは不可能であった。副葬品等は出土していない。

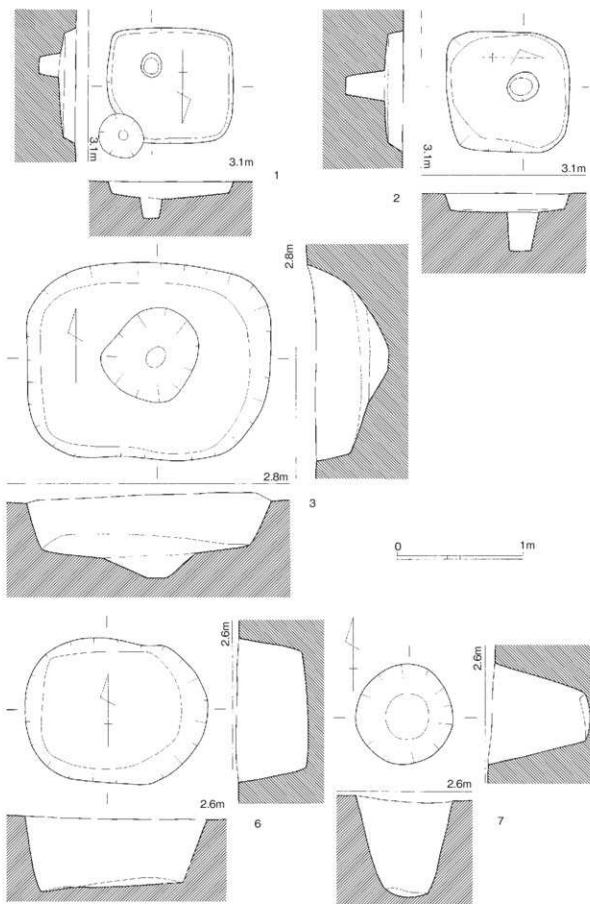
(4) 土坑

1号土坑 (図版7、第8図)

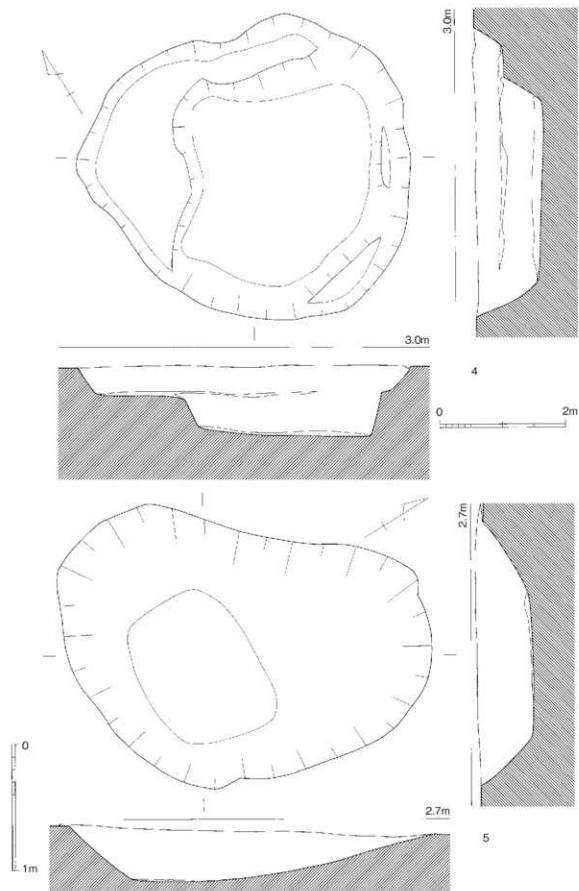
調査区の西端部で検出した。平面プランは東西100cm、南北90cmの隅丸方形を呈する。深さは約15cmで、中央からややずれた位置に深さ15cmのビットを検出した。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土しない。

2号土坑 (図版7、第8図)

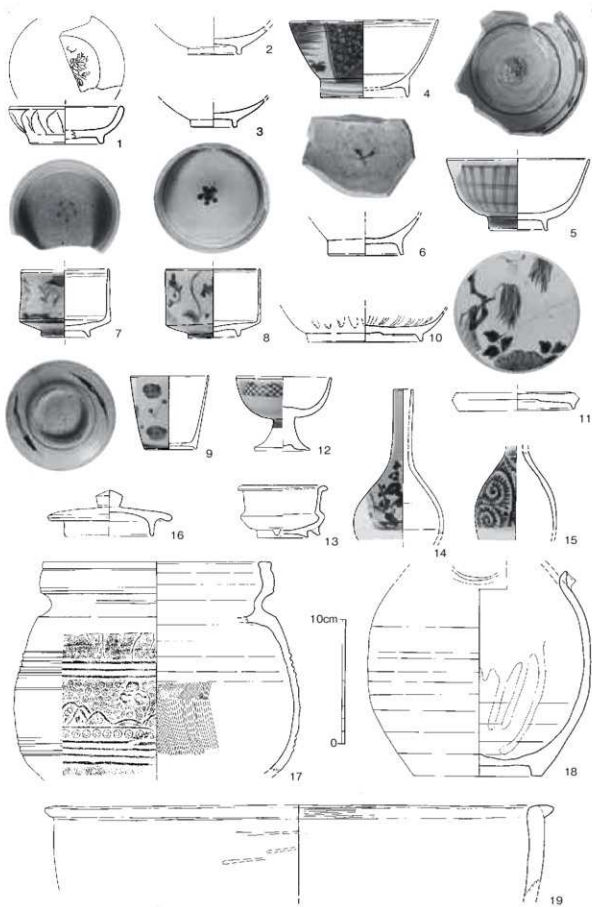
調査区の西端部で検出した。平面プランは東西95cm、南北100cmの隅丸方形を呈する。深さは約15cmで、中央からややずれた位置に深さ30cmのビットを検出した。埋土は淡黒褐色粘質土で



第8图 1~3·6·7号土坑实测图 (1/30)



第9図 4・5号土坑実測図（4は1/60、5は1/30）



第10图 4号土坑出土土器实测图(1/3)

あった。規模などが1号土坑と似通っており、関連がうかがえる。図化できる遺物は出土していない。

3号土坑（第8図）

調査区の西端部で検出した。平面プランは南北160cm、東西195cmの隅丸方形を呈する。全体に約30cm掘り込み、さらに中心部を約20cmすり鉢状に掘り込む。埋土は淡黒褐色粘質土であった。遺物は出土していない。

4号土坑（図版8、第9図）

調査区の中央北寄りで検出した。平面プランは東西580cm、南北480cmの巨大な楕円形の土坑である。周囲を約40cm掘り込んだのち、中央部をさらに60cm平坦に掘り込んでいる。埋土は黒褐色で、近代の廃棄土坑と思われる、陶磁器等の遺物が大量に出土した。

出土遺物（図版18、第10図）

1は混入の青磁の皿である。外面には蓮弁文、内面には草花文が描かれ、緑白色の釉薬がやや厚めにかけられる。高台内のみ露胎で、支え跡とみられる付着物がある。大野城市の御笠の森遺跡第9次調査で類似する青磁が出土している。2・3は近世の青磁碗であろうか。底部付近は露胎である。4は広東碗と呼ばれるものである。薄く丁寧な造りである。5は近世の碗である。見込に気泡が見られる。6も碗である。全面施釉される。7は筒形碗である。見込にコンニャク印判五弁花文が見られるので、波佐見焼であろう。8も筒形碗である。見込にコンニャク印判五弁花文が見られるので、波佐見焼であろう。9は猪口である。外面に花文が描かれ、薄く丁寧な造りである。10は皿である。蛇ノ目凹形高台である。11も蛇ノ目凹形高台の皿であるが、皿付から高台内が全て施釉されている。12は仏飯器である。外面に斜格子文が描かれる。13は香炉である。上底の底部で、周囲に3か所、小さな脚が付くが接地しない。小さいが精緻な造りである。14・15は瓶である。14は草花文が描かれる。15は蛸草文が描かれる。16は蓋である。外面のみに施釉される。17は用途不明の瓦器である。丁寧な作りで、外面には山の風景と植物が描かれる。18は陶器の壺で口が横に付くものである。19は混入の弥生土器であろう。内外面の調整はミガキである。

5号土坑（図版8、第9図）

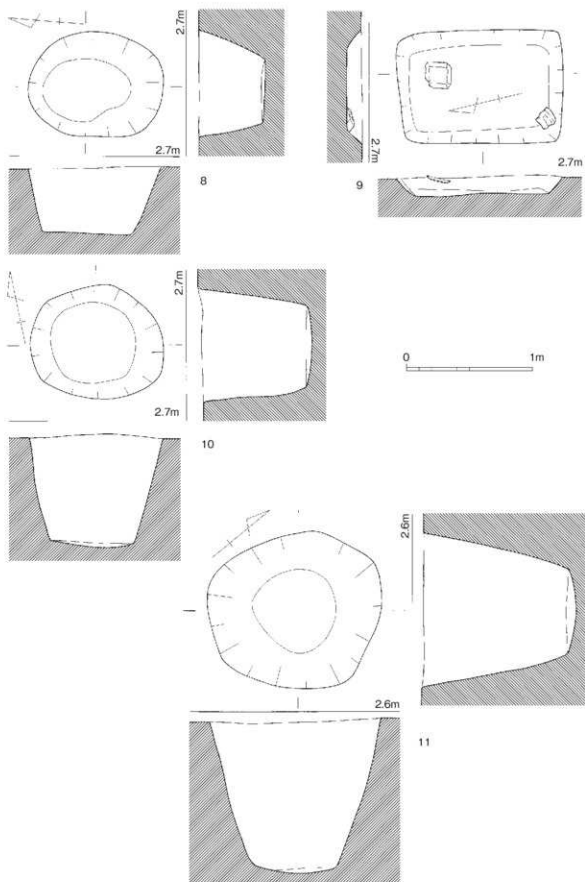
調査区の中央北寄りで検出した。平面プランは東西220cm、南北280cmの不整な楕円形を呈する。深さ40cmで壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は淡黒褐色粘質土であった。遺物は出土していない。

6号土坑（図版8、第8図）

調査区の中央北寄りで検出した。平面プランは東西145cm、南北110cmの楕円形を呈する。深さは55cmで、床面は東側で一部掘り間違いもあるが平坦である。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

7号土坑（図版9、第8図）

調査区の中央付近で検出した。平面プランは東西75cm、南北80cmのほぼ円形を呈する。深さは80cmで壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は淡黒褐色粘質土であった。形状から素掘りの



第11图 8~11号土坑实测图 (1/30)

井戸の可能性もある。遺物は出土していない。

8号土坑 (図版9、第11図)

調査区の東寄りで検出した。平面プランは東西80cm、南北105cmの楕円形を呈する。深さは50cmで床面は平坦である。壁の立ち上がりはやや緩やかである。埋土は淡黒褐色粘質土であった。遺物は出土していない。

9号土坑 (図版9、第11図)

調査区の北西部で検出した。平面プランは東西90cm、南北130cmの長方形を呈する。壁の深さは15cmで床面は平坦である。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は黒褐色粘質土であった。遺物は近代の陶磁器の他、石臼の破片が出土している。

出土土器 (図版18、第12図)

1は磁器の皿である。正方形で角を面取りし、八角形とする。内外面に草花文が描かれる。高台内には「玩」の名が入る。近世の末から近代にかけての肥前系の磁器と思われる。

10号土坑 (図版10、第11図)

調査区の中央南寄りで検出した。平面プランは東西105cm、南北90cmのほぼ円形を呈する。深さは90cmで床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりは急である。埋土は淡黒褐色粘質土であった。形状から素掘りの井戸の可能性もある。遺物は出土していない。

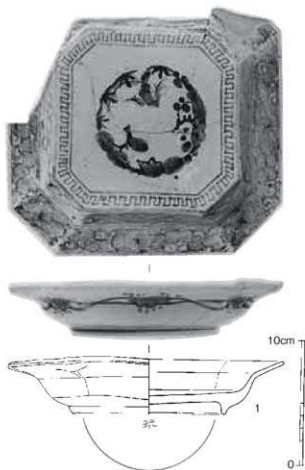
11号土坑 (図版10、第11図)

調査区の中央南寄りで検出した。平面プランは東西130cm、南北140cmのやや不整な円形を呈する。深さは120cmで床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりはやや急である。埋土は淡黒褐色粘質土であった。形状から素掘りの井戸の可能性もある。遺物は出土していない。

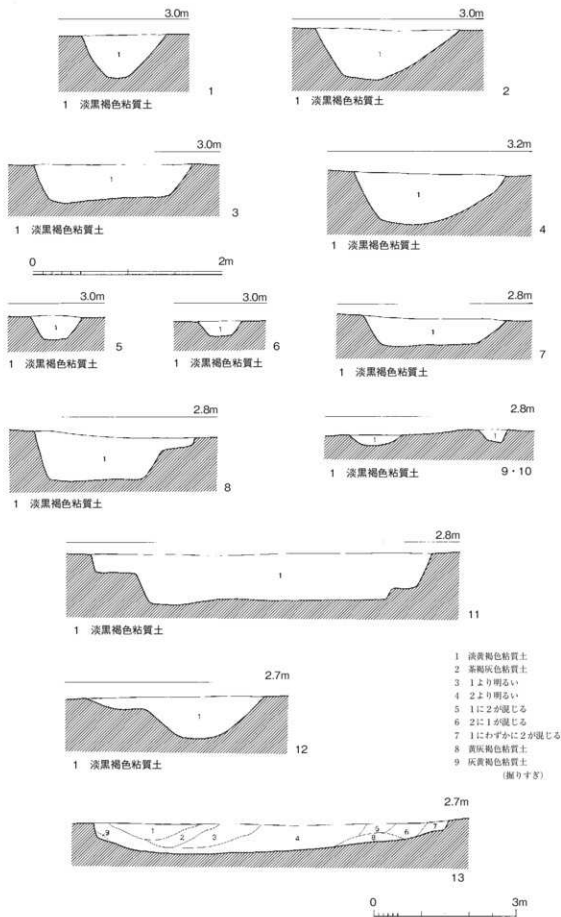
(5) 溝

1号溝 (第13図)

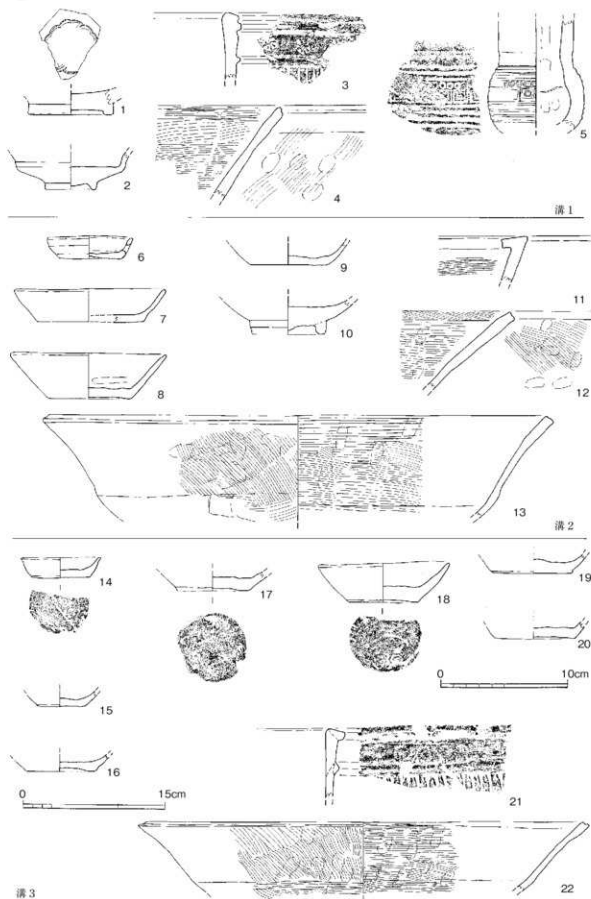
調査区の北西端部で検出した。南北に延びる溝で南は浅くなり自然に消失し、北側は現代溝に切られる。断面は幅80cmで、深さ50cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。



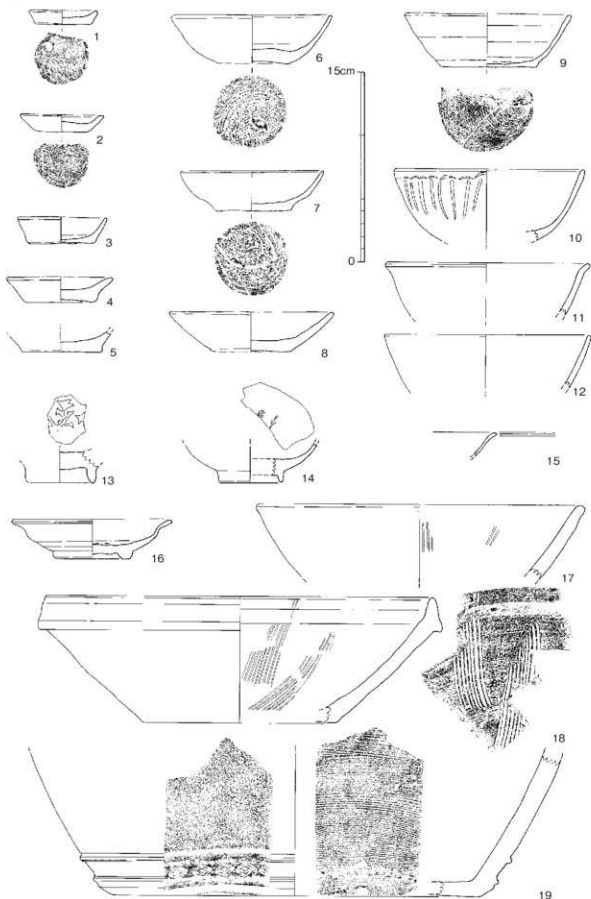
12 第12図 9号土坑出土土器実測図 (1/3)



第13図 1～13号溝土層実測図 (13は1/80、他は1/40)



第14図 1～3号溝出土土器実測図 (22は1/4、他は1/3)



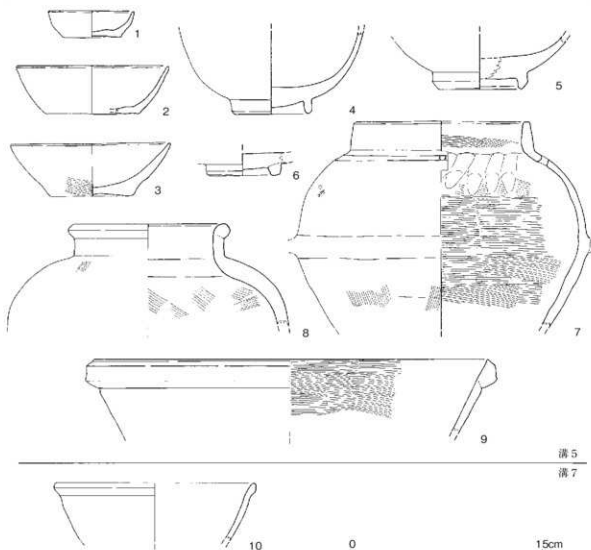
第15图 4号溝出土土器実測図 (1/3)

出土土器（第14図）

1は青磁の碗である。見込に文様が描かれる。豊付から高台内は露胎である。2は青磁の杯である。底部と体部の境で強く内湾する。豊付から高台内は露胎である。3は瓦質の火鉢である。内外面の調整はナデで、外面に花文のスタンプが施される。4は土鍋である。わずかに外反する体部である。外面の調整は縦方向のハケメの後、ナデである。内面の調整は横方向のハケメである。5は瓦質の壺であろうか。全体の造りは丁寧で、内外面の調整はナデである。特に内面には強いナデ痕が残る。外面には竹管文と雷文のスタンプが連続して押される。

2号溝（第13図）

調査区の西端部で検出した。南北に延びる溝で南側は浅くなり消失するが、途中で西側へ折れ、調査区外へ延びる。北側は自然に消失するが、本来、18号溝とつながっていたものと考えられる。断面は幅155cm、深さ50cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。



第16図 5・7号溝出土土器実測図（1/3）

出土土器 (図版18、第14図)

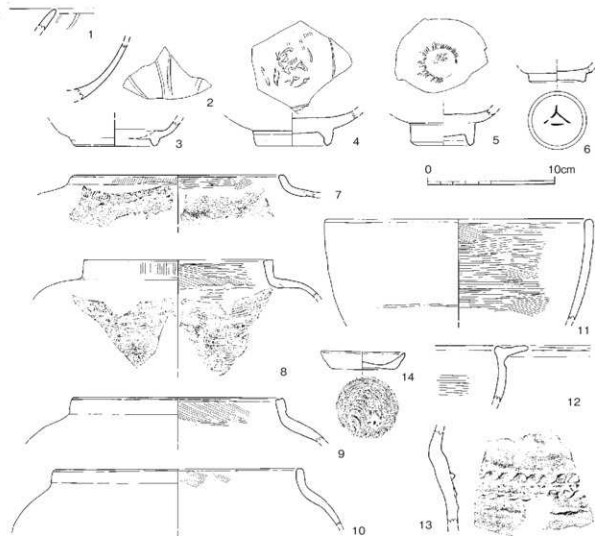
6は土師質の小皿である。体部に焼成前とみられる穿孔がある。10は青磁の碗である。全面に施釉される。11は火鉢である。外傾する体部から内側に口縁が伸びるものである。内面の調整は横方向のハケメである。12は土鍋である。内外面の調整はハケメである。部分的に圧痕が残る。13は口径40cmの土鍋である。体部はわずかに外反するが、中位で屈曲する。内外面の調整はハケメで、部分的に圧痕が残る。外面にはススが附着する。

3号溝 (第13図)

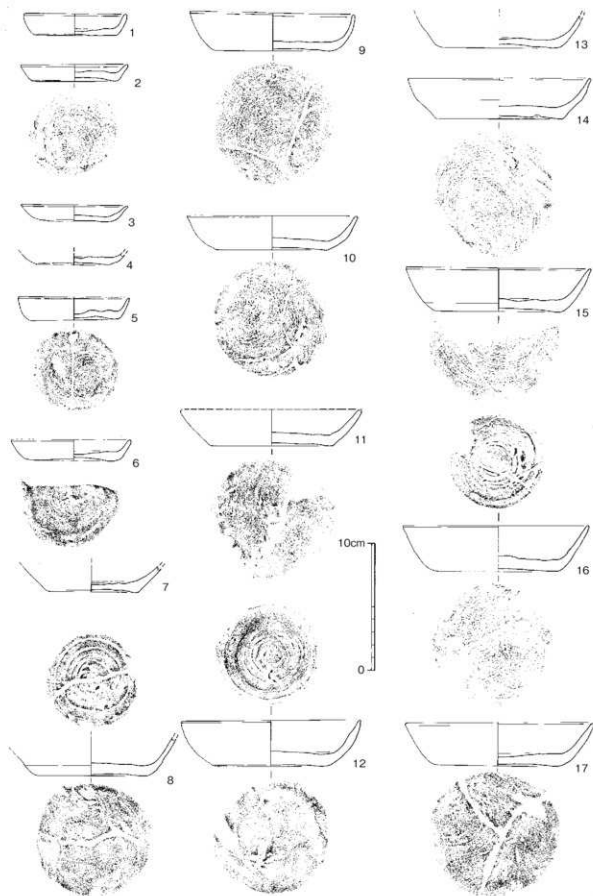
調査区の西端部で検出した。南北に延びる溝で、南は浅くなり自然に消失し、北側は4号溝を切っている。断面は幅170cm、深さ40cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (第14図)

14~16、19~21は土師質の皿である。底部は糸切り底である。17・18は土師質の杯である。底部は糸切り底である。21は瓦質の火鉢である。内外面の調整はナデで、外面には花文のスタンプが連続して押される。22は土鍋である。外面は縦方向のハケメである。内面は横方向のハケメである。ともに圧痕が残る。体部はわずかに外反するが、中位で屈曲する。外面にはススが附着する。



第17図 8号溝出土土器実測図 (1/3)



第18图 11号溝出土土器実測図 (1/3)

4号溝 (第13図)

調査区の西端部で検出した。東西に延びる溝で、東側は途中で終わり、西側は3号溝に切られる。断面は幅160cm、深さ55cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (図版18、第15図)

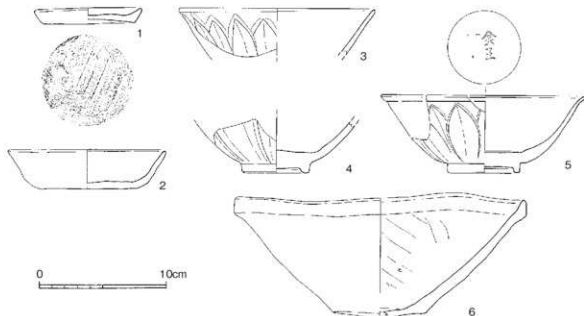
1～5は土師質の小皿である。底部は糸切り底である。6～9は土師器の杯である。底部は糸切り底である。10～14は青磁の碗である。10の外面には簡略化された蓮弁文が描かれる。11はわずかに外反する口縁で、軸が厚く施される。12はわずかに内湾する口縁である。13の見込には草文が描かれる。高台内のみが露胎である。14の見込にも草文が描かれる。15は白磁の碗である。口縁端部がわずかに外反する。16は陶器の皿である。底部付近は露胎である。見込は蛇ノ目軸刺ぎである。17は瓦質の播鉢である。内外面の調整はナデで、内面には播目が施される。18は陶器の播鉢である。備前焼であろうか。内面には8本単位の播目が粗く施される。19は火鉢である。外面の調整はナデで、菱形のスタンプ文が連続して押される。内面は横方向のハケメである。

5号溝 (第13図)

調査区の西端部で検出した。南北に延びる溝で南側は途中で終わり、北側はピットに切られる。断面は幅50cm、深さ25cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (第16図)

1は土師質の小皿である。内外面の調整はナデである。2・3は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。4～6は青磁の碗である。4は内湾する体部で、軸が厚くかけられる。5の高台内は露胎である。6の畳付から高台内にかけては露胎である。7は瓦質の湯釜である。外面の調整はハケメの後、ナデである。口縁部と肩部との境は強いナデである。その他の部分は横方向のハケメである。肩部に焼成前の穿孔が施される。8は湯釜であろうか。内外面の調整はハケメである。9は肥前系の土鍋である。外面の調整はナデである。内面の調整は横方向のハケメである。外面にはスガが付着する。



第19図 12号溝出土土器実測図 (1/3)

6号溝 (第13図)

調査区の西端部で検出した。南北に延びる溝で両端とも浅くなり途中で消失する。断面は幅50cm、深さ15cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

7号溝 (第13図)

調査区の南西寄りで見出した。東西に延びる溝で、両端とも途中で消失する断面は幅150cm、深さ30cmの逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土であった。

出土土器 (第16図)

10は青磁の碗である。口縁端部はわずかに外反し、軸が厚く施される。

8号溝 (図版11、第13図)

調査区の東端部で見出した。東西に延びる溝で、東側は調査区外へ、西側は現代溝に切られる。中央部分付近から南側へも掘削されており、調査区外へ延びている。断面は幅170cm、深さ50cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。15号溝と軸の方向、幅が同じことから関連があると考えられる。

出土土器 (図版18、第17図)

1～5は青磁の碗である。2は蓮弁文が施される。3は全面に施軸される。4は見込に花文が描かれる。高台内は露胎である。5は見込に文様が描かれる。高台内は露胎である。6は天目茶碗の底部である。置付から高台内は露胎である。底部には墨書が施されるが、文字ではなく、記号であろう。7～10は湯釜である。7・8の内外面はハケメである。11は捏鉢である。外面の調整はナデ、内面の調整は横方向のハケメである。12は土鍋である。外面の調整はナデ、内面の調整はハケメである。13は陶器の甕である。突帯を連続して潰し、文様とする。14は土師質の小皿である。内外面の調整はナデで、底部は糸切り底である。

9号溝 (第13図)

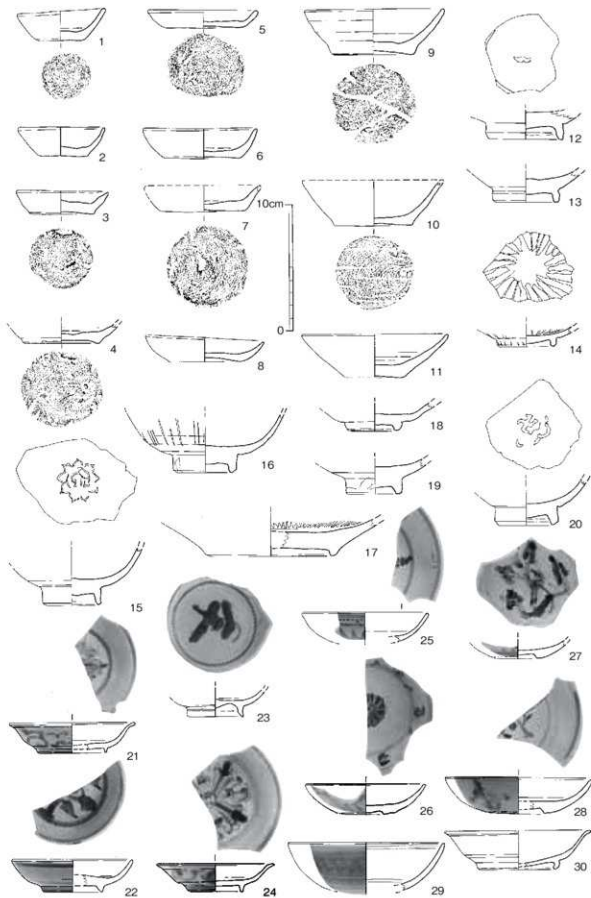
調査区の中央北寄りで見出した。南北に延びる溝で、南は浅くなり自然に消失し、北側は現代溝に切られる。断面は幅55cm、深さ10cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

10号溝 (第13図)

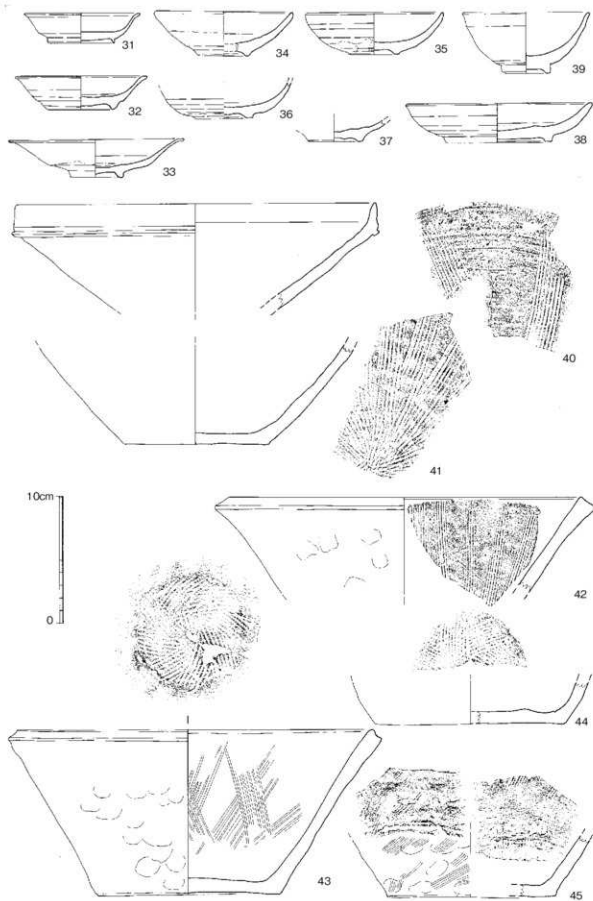
調査区の北寄りで見出した。南北に延びる溝で、南は浅くなり自然に消失し、北側は端部が東に折れ、現代溝に切られる。断面は幅30cm、深さ10cmの逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土であった。並行する9号溝と関連が考えられる。図化できる遺物は出土していない。

11号溝 (図版11、第13図)

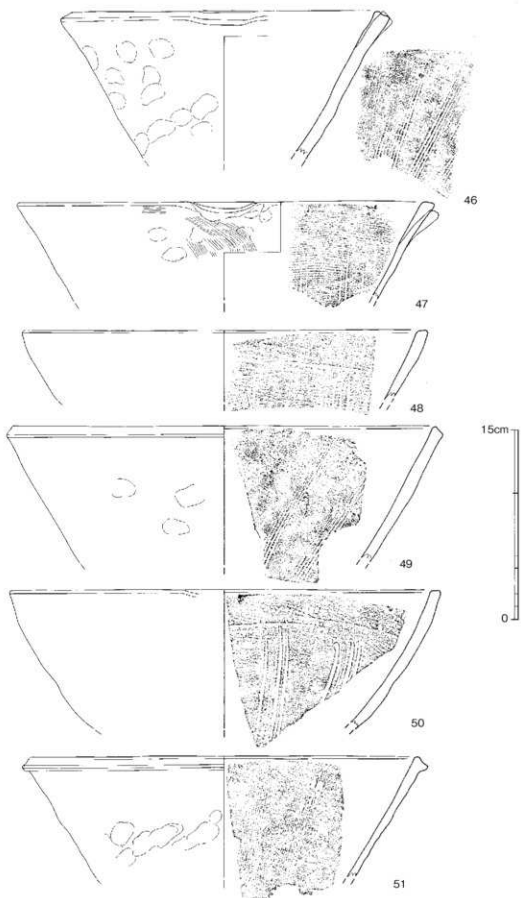
調査区中央北寄りで見出した。南北に延びる溝で両端とも現代溝に切られる。14号溝を切る。断面は幅370cm、深さ50cmで両側に段の付く逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。底面付近より炭化米を検出した。



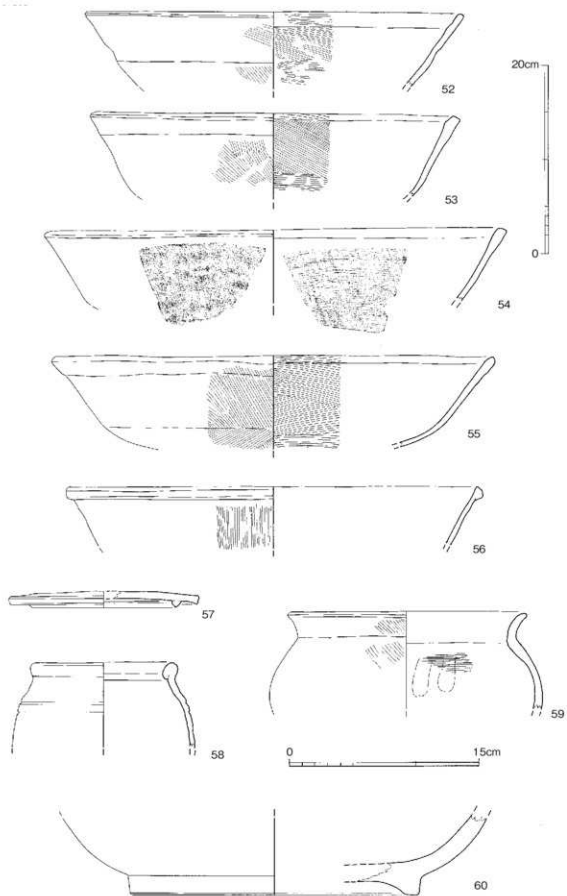
第20图 13号溝出土土器実測图①(1/3)



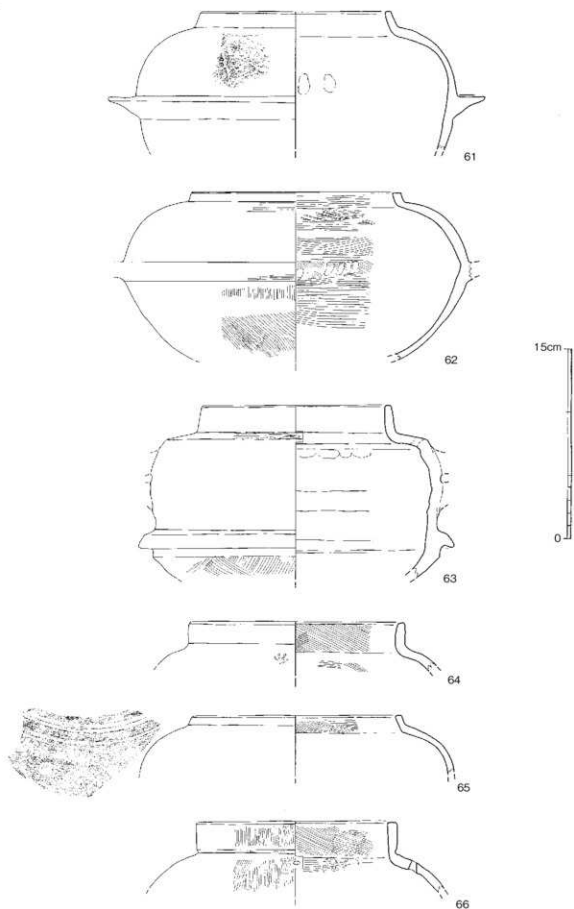
第21图 13号溝出土土器実測図②(1/3)



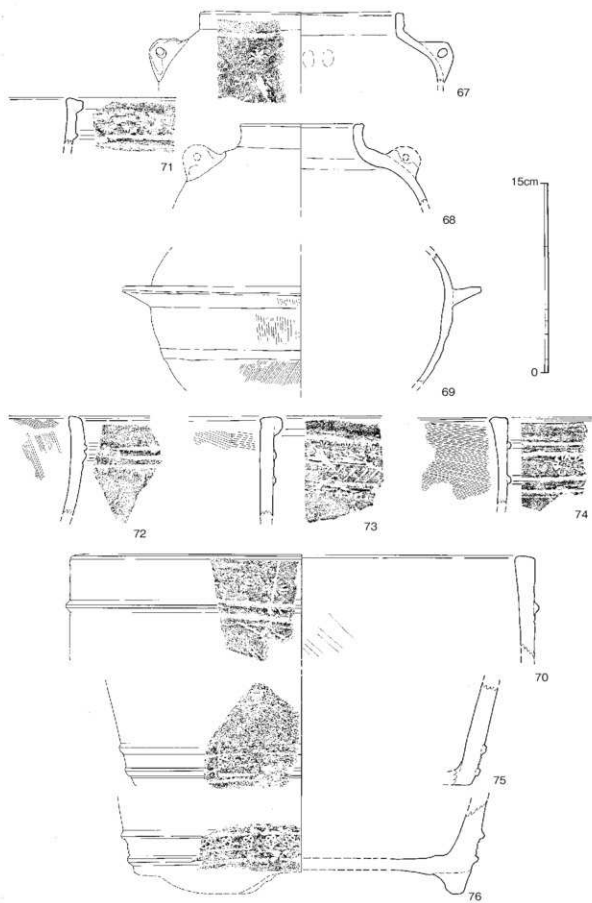
第22图 13号溝出土土器実測図③ (1/3)



第23図 13号溝出土土器実測図④ (52~56は1/4、他は1/3)



第24图 13号沟出土土器实测图⑤ (1/3)



第25图 13号沟出土土器实测图⑥(1/3)

出土土器 (図版18、第18図)

1～6は土師質の小皿である。内外面の調整はナデで、底部の調整は糸切りである。7～17は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。見込には明瞭に粘土紐の巻き痕が残る。底部は糸切り底である。

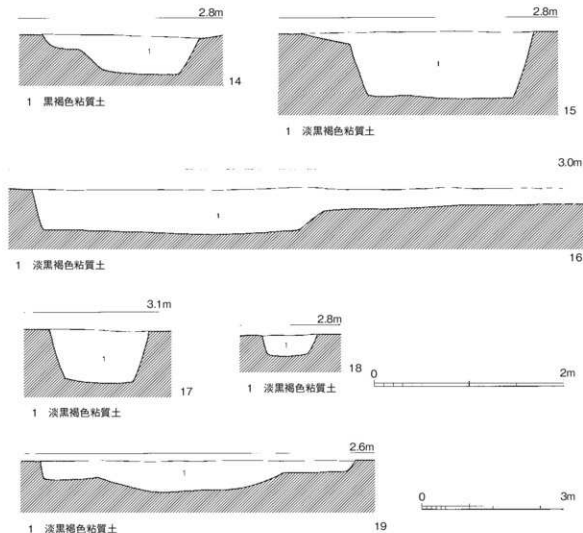
12号溝 (図版12、第13図)

調査区中央南寄りて検出した。東西にやや蛇行しながら延びる溝で両端を16号溝・13号溝に切られる。断面は場所によって異なるが幅190cm、深さ50cmの逆台形を呈する。

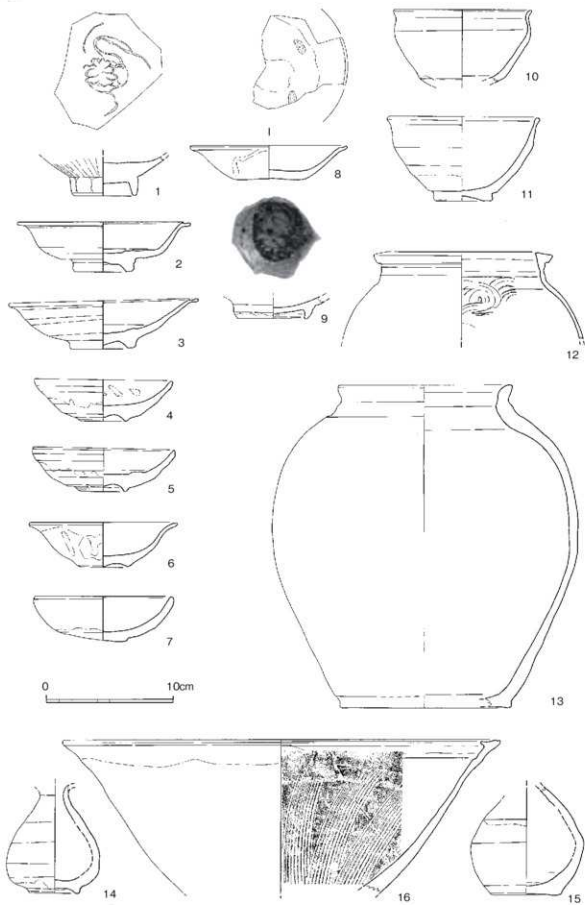
埋土は黒褐色粘質土であった。

出土土器 (図版19、第19図)

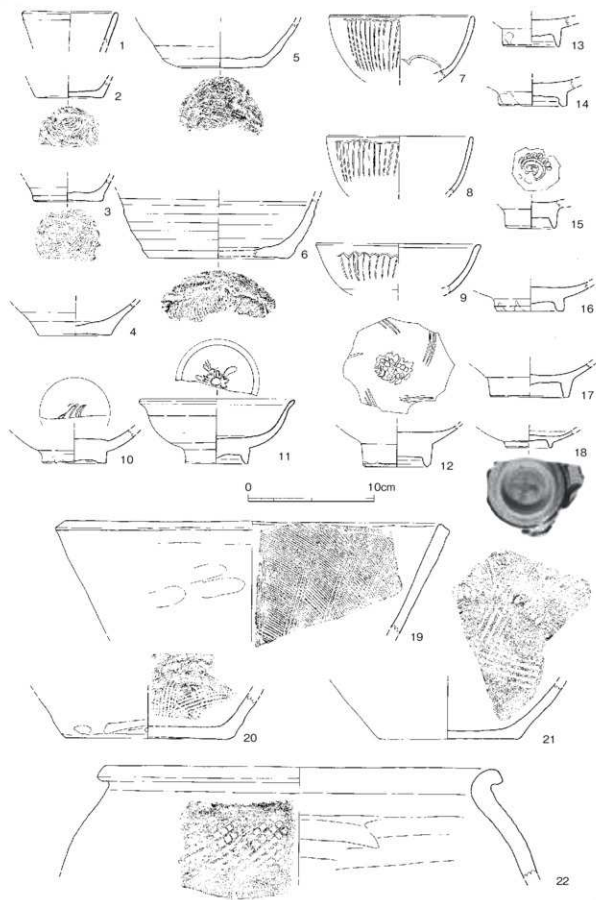
1は土師質の小皿である。内外面の調整はナデである。底部は糸切り底で、板状圧痕が残る。2は土師器の杯である。内外面の調整はハケメである。3～5は青磁の碗である。いずれも竊蓮弁文である。5の見込には「金玉満堂」のスタンプが押される。6は東播系の捏鉢である。外面の調整はナデ、内面はやや強いナデである。



第26図 14～19号溝土層実測図 (16・19は1/80、他は1/40)



第27图 15号溝出土土器実測図 (1/3)



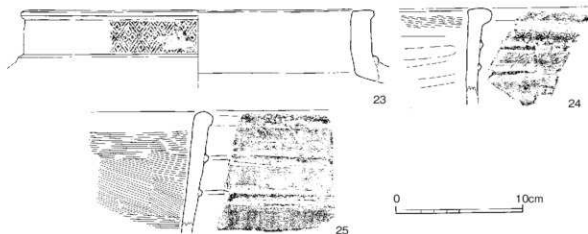
第28图 16号溝出土土器実測図①(1/3)

13号溝 (図版12・13、第13図)

調査区中央南寄りで見出した。南北に延びる溝で、南側は調査区外へ伸び、北側は現代溝に切られる。12号溝を切る。断面は幅750cm、深さ60cmの逆台形を呈する。土層から幅を狭めながら数回の掘り直しがあった可能性が考えられる。

出土土器 (図版19・20、第20～25図)

1～8は土師質の皿である。内外面の調整はナデで、底部は糸切り底である。9～11は土師質の杯である。12～16は青磁の碗である。12の見込には文様が描かれる。高台内は露胎である。13の高台内は露胎である。14は菊花状に整形する。全面施釉である。15は内湾する体部で、見込には花文が描かれる。高台内は露胎である。16の外側は簡略化された蓮弁文である。畳付から高台内は露胎である。器面に付着物が多い。17は青磁の盤である。高台内の中心付近の釉葉を掻き取っている。18～20は発色の悪い青磁であろうか。18は全面施釉である。19は畳付から高台内は露胎である。20の高台内は露胎である。見込には「卍」とそれを囲む花文が描かれる。21～29は青花の皿である。21は畳付のみ露胎である。22は畳付から高台内が露胎である。23・24は畳付部分が露胎である。24～28は菴筒底の底部である。30は白磁の皿で、畳付のみ露胎である。31は白磁の皿である。畳付部分は露胎である。32～38は陶器の皿である。32の底部は露胎である。見込は蛇ノ目軸割ぎである。33は全体的に薄手で造りが丁寧である。底部付近は露胎で、見込に3か所の目跡が残る。34の底部は露胎である。見込に目跡が残る。35の底部付近は露胎である。37は見込に目跡が残る。38は底部付近露胎で、見込部分の釉葉を掻き取っている。39は陶器の碗である。畳付から高台内は露胎である。40は備前の播鉢であろうか。内外面の調整はナデで、内面に8本単位の播目が粗く施される。41は陶器の播鉢である。内外面の調整はナデで、内面に7本単位の播目が施される。42～51は瓦質の播鉢である。42の内面には7本単位の播目が施される。43の内面には交差して播目が施される。46の外側はナデ、内側はハケメの後、8本単位の播目が施される。50は内面に4本単位の播目が施される。51は10本単位の播り目が施される。52～55は土鍋である。いずれも内外面の調整はハケメである。外側にはススが付着する。56は肥前系の土鍋である。外側の調整は縦方向のハケメで、外側にはススが付着する。57は瓦質の蓋である。内外面の調整はナデである。58は陶器の壺である。口縁端部は内側に折り曲げる。外側はナデ調整で肩部に2条の沈線を施す。内側はタタキである。



第29図 16号溝出土土器実測図② (1/3)

59は土師器の甕であろうか。内外面の調整はハケメで、内面には強い圧痕が残る。60は陶器の甕の底部である。内外面の調整はナデで、内面にはススが付着する。61～69は湯釜である。61の内外面の調整はナデで、肩部に梅花文のスタンプを施す。62の内外面の調整はハケメである。63は2か所に耳が付く。肩部に穿孔が施される。64の外表面はナデ調整で、内表面はハケメ調整である。肩部には花文のスタンプが施される。66の内外面の調整はハケメで、肩部に穿孔が施される。67は2か所に耳が付く。肩部に花文のスタンプが施される。68は2か所に耳が付く。肩部には沈線と弧文が施される。69の外表面にはススが付着する。70～76は火鉢である。いずれも外表面に花文のスタンプが施される。

14号溝 (第26図)

調査区中央北寄りで検出した。東西に延びる溝で11号溝に切られる。西側は現代溝に切られ、東側は4号土坑に切られ終わっている。断面は幅165cm、深さ40cmの逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

15号溝 (図版13、第26図)

調査区の東寄りで検出した。南北に延びる溝で南側は調査区外へ延び、北側は現代溝に切られる。断面は幅250cm、深さ70cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。並行、直行する8号溝と関連があるであろう。

出土土器 (図版20・21、第27図)

1は青磁碗で、見込には花文が施される。2・3は溝縁皿である。2の畳付は露胎で、見込には4か所の目跡が残る。3は畳付から高台内は露胎で、畳付部分に目跡が残る。見込には3か所の目跡が残る。4の底部付近は露胎である。7は切り離し未調整の底部で、壓りが悪い。底部付近は露胎である。9は磁器の皿である。見込には文様が描かれる。畳付部分は露胎である。10・11は天目茶碗である。いずれも瀬戸産であろうか。14は陶器の壺である。底部付近は露胎である。釉の特徴から高取焼系であろうか。15は陶器の壺で、底部は糸切りで露胎である。16は肥前系の播鉢である。内外面の調整はナデで、9本単位の播目が施される。

16号溝 (図版13・14、第26図)

調査区中央南寄りで検出した。南北に延びる溝であり、両端とも調査区外へ延びる。断面は西の立ち上がりを検出していないので幅は不明であるが1,080cm以上である。深さは90cmである。埋土は黒褐色粘質土であった。

出土土器 (図版21、第28・29図)

1～4は土師質の小皿である。内外面の調整はナデである。底部は糸切り底である。いずれも焼成は良好である。5・6は土師質の杯である。5の底部は糸切り底である。6は外表面に強いナデ痕が残る。7～16は青磁の碗である。7～9は外表面に簡略化された蓮弁文が施される。10の見込には文様が施される。畳付から高台内は露胎である。11はわずかに外反する口縁である。見込には花文が施される。畳付から高台内は露胎である。12は見込に花文が描かれる。高台内は露胎である。13・14は畳付から高台内は露胎である。15の見込には花文が描かれる。畳付から高台内は露胎である。16は畳付から高台内は露胎である。17は白磁の碗である。底部付近は露胎である。18は青花の皿である。底部に「十」字の墨書がある。19～21は瓦質の播鉢である。19の外表面はナデ調整、内面

はハケメの後、4本単位の描目を施す。20は7本単位の描目を施す。21は4本単位の描目である。22は瓦質の甕である。外面は格子タタキ、内面の調整はナデである。23は風炉である。外面には菱形の連続文が施される。24・25は火鉢である。いずれも瓦質で焼成は良好である。24は外面に花文のスタンプが施される。25は外面にスタンプが施される。

17号溝 (第26図)

調査区の北東端部で検出した。東西に延びる溝で、両端は調査区外へ延びる。断面は幅105cm、深さ55cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

18号溝 (第26図)

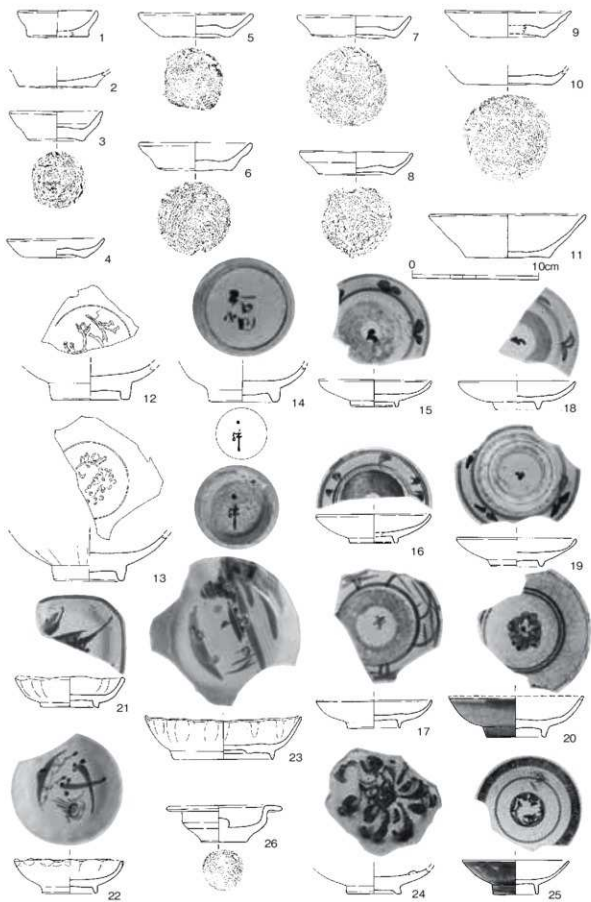
調査区の北西部で検出した。南北に延びる溝で北側は現代溝に切られる。南側は浅くなり自然に消失するが、2号溝につながるものと考えられる。断面は幅60cm、深さ20cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。図化できる遺物は出土していない。

19号溝 (図版14、第26図)

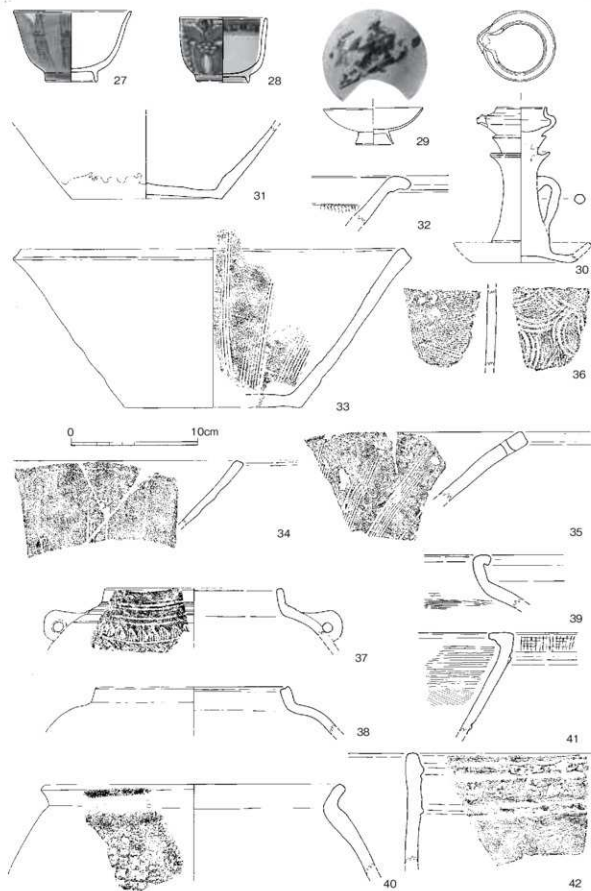
調査区の南西部で検出した。東西に延びる溝で両端は調査区外へ延びる。断面は幅670cm、深さ70cmで、両側に段が付く逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (図版21~23、第30~32図)

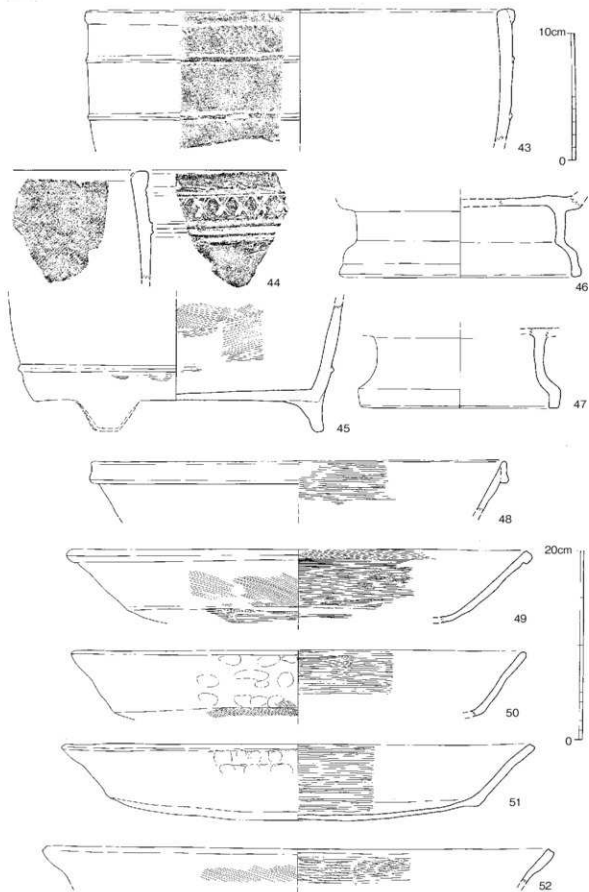
1~10は土師質の小皿である。内外面の調整はナデである。底部は糸切り底である。11は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。12・13は青磁の碗である。12の見込には草花文が施される。高台内は露胎である。13は見込に花文が施される。高台内は露胎である。14は磁器の碗である。見込に「福」の文字が書かれる。高台内には点と「中」の文字が墨書される。15~19は磁器の皿である。蛇ノ目軸割ぎで、畳付部分は露胎である。20は磁器の皿である。畳付から高台内は露胎である。21は磁器の皿で正方形の角を面取りし、八角形に仕上げる。畳付部分は露胎である。22は磁器の皿で、口縁部を波状に仕上げる。畳付部分は露胎である。23は口縁部を波状に仕上げる蛇ノ目四角高台皿である。見込には5か所の針目跡が付く。24の畳付から高台内は露胎である。25は磁器の杯である。畳付部分は露胎である。26は蓋である。底部は糸切りである。27は磁器の碗である。見込は蛇ノ目軸割ぎで畳付部分は露胎である。28は磁器の碗である。畳付部分は露胎である。29は磁器の杯である。30はカンテラ形のひょうそくである。幕末から明治にかけてのものと考えられる。31は壺の底部であろうか。底部付近は露胎である。32は陶器の描鉢である。33~35は瓦質の描鉢である。33の外面はナデ調整、内面はハケメの後、8本単位の描目を施す。34は4本単位の描目を施す。35は7本単位の描目を施す。36は描鉢の底部であろうか。円弧の描目を施す。37~39は瓦質の湯釜である。37は耳が2か所につき、肩部にスタンプが施される。38の内外面の調整はナデである。40は瓦質の甕である。外面の調整は格子タタキ、内面の調整はナデである。41~45は火鉢である。41は外傾する体部に口縁が内側に伸びるものである。口縁外面には刻みがつけられる。内面の調整はハケメである。42~44は外面にスタンプが押されるものである。46・47は火鉢の台の部分であろうか。48・49は肥前系の土鍋である。48の外面の調整はナデで、内面の調整は横方向のハケメである。49の内外面の調整はハケメである。50~52は土鍋である。50・51の外面にはススが付着する。



第30图 19号溝出土土器実測図①(1/3)



第31图 19号溝出土土器実測图② (1/3)



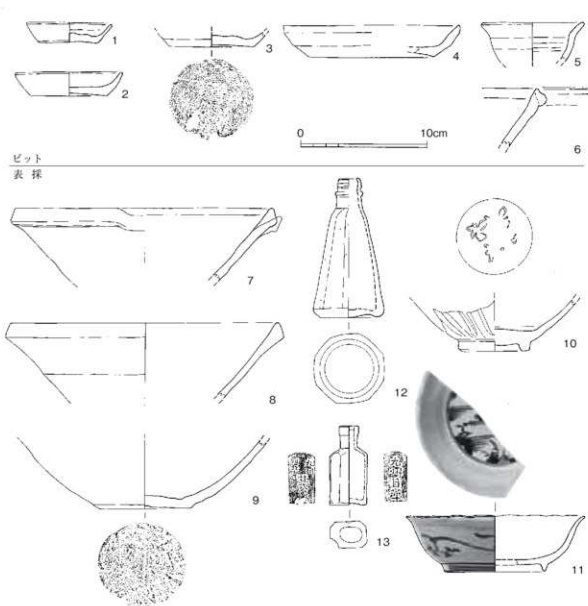
第32図 19号溝出土土器実測図③ (45・49～52は1/4、他は1/3)

ピット出土土器 (図版23、第33図)

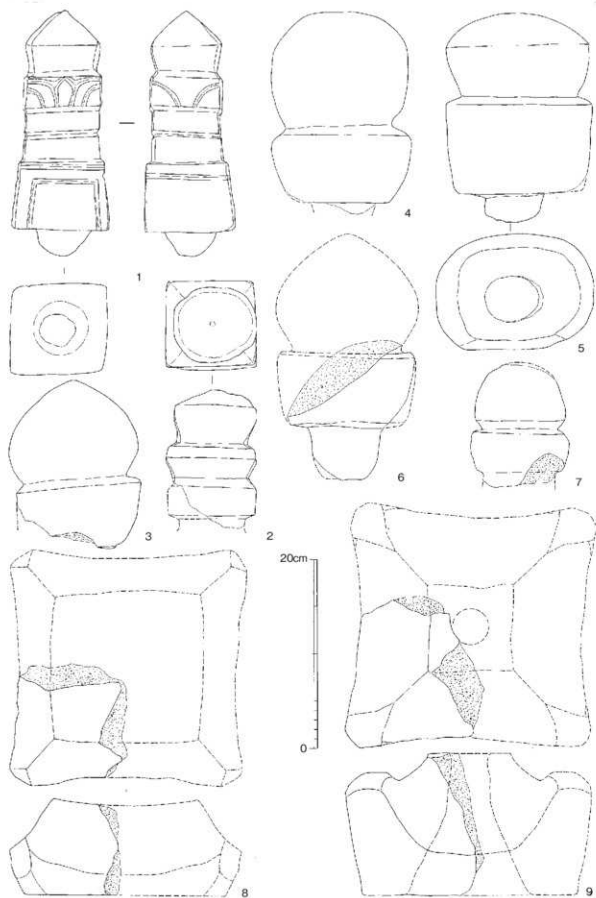
1～3は土師質の小皿である。内外面の調整はナデで、底部は糸切り底である。4は土師質の杯である。底部は糸切り底である。5は土師質の杯である。内外面の調整はナデである。6は肥前系の土鍋である。内外面の調整はナデである。外面にはススが附着する。

表採土器 (図版24、第33図)

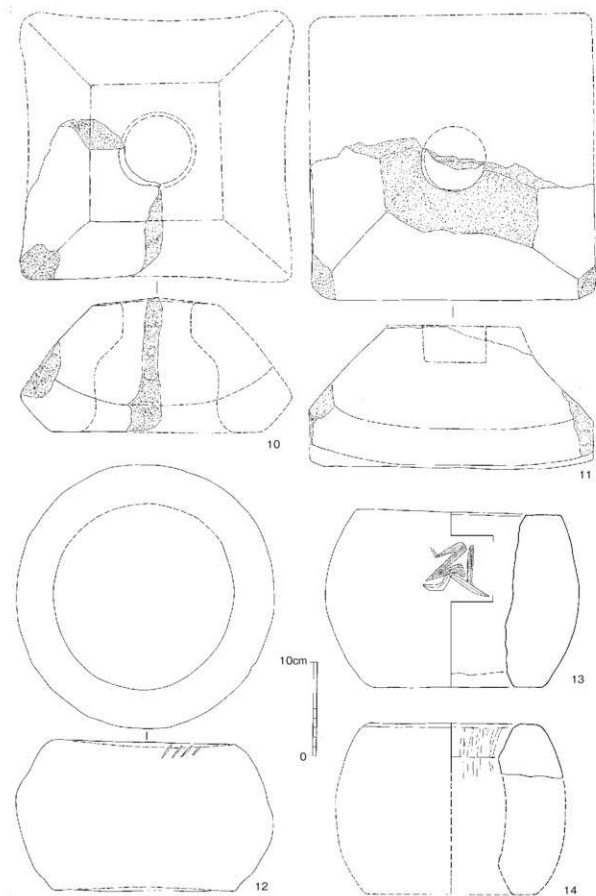
7～9は東播系の埴鉢である。いずれも注記では9号土坑となっていたが、遺構の時期及び日付が大きく異なるため、出土位置不明とした。いずれも内外面の調整はナデである。10は青磁の碗である。外面は鎗蓮弁文、見込には花文を施す。高台内は露胎である。11は磁器の皿である。見込には風景が描かれ、外面は草文が描かれる。全面施釉である。12はガラス瓶である。透明で八角形の形状から化粧品の瓶であろうか。気泡をわずかに含む。口縁はネジ式になっている。13は目薬の瓶



第33図 ピット・表採土器実測図 (1/3)



第34图 出土石制品实测图①(1/4)

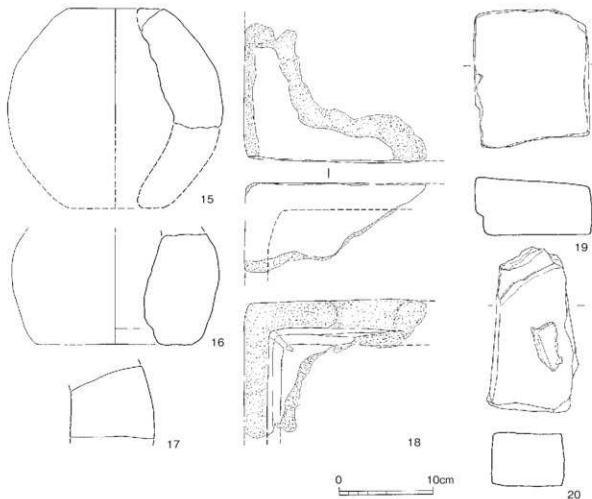


第35图 出土石製品実測図② (1/4)

である。青色で表面に「九州目薬」、裏面に「九州製薬株式会社□(社)」の文字がある。

出土石製品 (図版24・25、第34～37図)

1は宝篋印塔の相輪の部分である。凝灰岩裂で方柱状を呈する。宝珠部分にも角が残り、請花は線刻により表現される。正面は5弁の蓮の花びらを表現しているが、他の面は2本の弧線のみである。九輪は2段のみである。九輪下の請花は無く、門状の線刻を施す。他の面は横方向の線刻のみである。底面には組み合わせのための突起がある。2は宝篋印塔の相輪の部分である。気泡の多い凝灰岩裂で方形を呈する。宝珠は円形である。その下位は請花であろうか、装飾は施されないが、下位の九輪と思われるものとは形状が異なる。九輪の1段目部分から失われている。3～7は五輪塔の空風輪である。3は凝灰岩裂で、円柱状である。空輪の先端はわずかに尖る。風輪の下半部を欠失する。4は凝灰岩裂で、円柱状である。空輪は頂部が丸い。接合のための突起部分を欠失する。5は凝灰岩裂で、楕円形を呈する。空輪は頂部がやや平坦である。6は凝灰岩裂で、円柱状を呈する。空輪部分のほとんどを欠失する。7は凝灰岩裂で、円柱状を呈する。空輪の頂部は丸い。接合のための突起部分を欠失する。8は凝灰岩裂の火輪である。上面がわずかに反り上がる。9は宝篋印塔の笠の部分であろうか。凝灰岩裂である。周囲の突起は隅飾突起の簡略化されたものであろう。

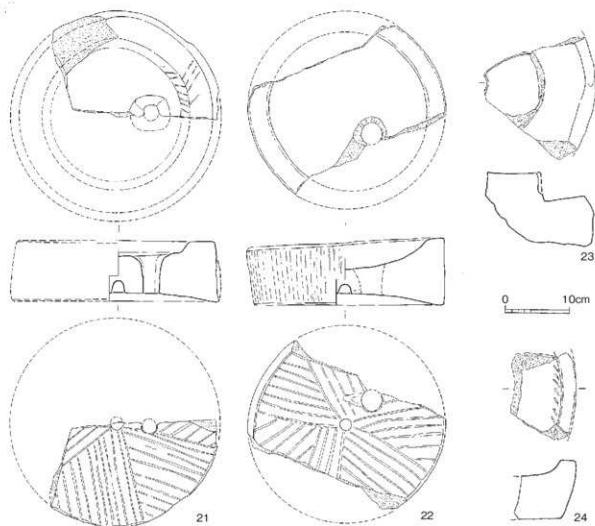


第36図 出土石製品実測図③ (1/4)

中心に穿孔が施される。10・11は凝灰岩製の火輪である。10は中央に穿孔が施される。11は中心に掘り込みが施される。12～17は凝灰岩製の水輪である。上面、下面がわずかにくぼむ。部分的にノミ痕が残る。13は中心を粗く掘り抜かれる。外面には梵字で大日如来を表す「ア」が線刻され、墨書きされる。14の内面にはノミ痕が残る。15は球形に近い。図面上の復元が間違えている可能性もある。16の下部には削り込みがある。18は凝灰岩製の地輪である。中を削り抜いている。19・20は片岩製の砥石である。19は3面が使用されている。20は全体にスズが付着する。21・22は凝灰岩製の土臼である。21の中心には軸受けがあり、ややずれた位置に供給口がある。ものくぼりはない。底面には溝があり、5～6分画になるであろう。22の中心には軸受けがあり、ややずれた位置に供給口がある。供給口にはものくぼりがある。底面には溝があり、6分画になるであろう。23・24は凝灰岩製の土臼である。23の中心には芯棒穴がある。上面に溝はない。24は受皿の部分で内面にはノミ痕が残る。

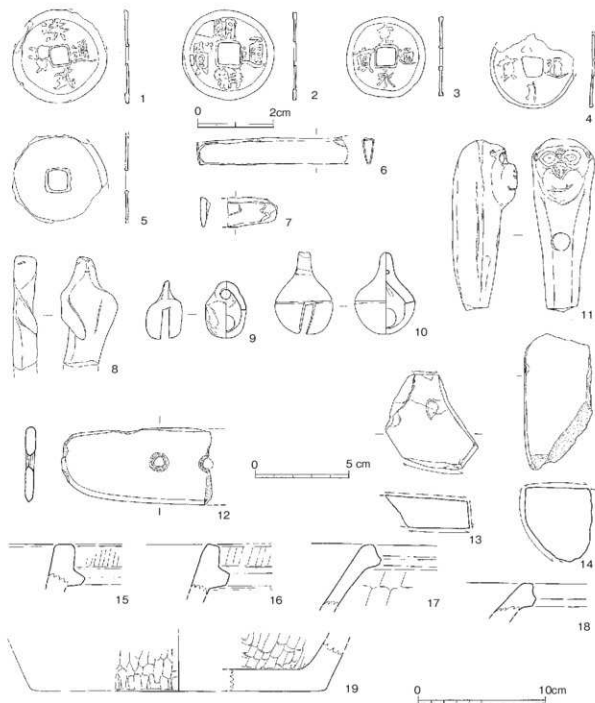
出土特殊遺物（図版25、第38図）

1は洪武通寶で1368年の初鑄である。表採の遺物である。2は朝鮮通寶である。2か所に穴があるが鑄上りが悪いためのようである。13号溝からの出土である。3・4は寛永通寶である。いずれ



第37図 出土石製品実測図④ (1/6)

も古寛永であろう。3は遺構面出土である。4は表採である。5の銭種は不明である。表採の遺物である。6は鉄製の刀子である。青銅製の鞘が伴う。13号溝出土である。7は鉄製の刀子であろうか。13号溝出土である。8は土人形である。刻みにより目と口を表現する。19号溝から出土している。9・10は土鈴である。9は表採である。10の外面には一条の沈線が巡る。2号溝から出土している。11は土製の笛である。型取りで猿の顔が表現される。19号溝から出土している。12は石庵丁である。頁岩製である。13号溝から出土している。13は片岩製の砥石である。5面を使用している。



第38図 出土特殊遺物実測図 (1~5は1/1、6~14は1/2、他は1/3)

13号溝から出土している。14は砂岩製の砥石である。2面を砥石として使用している。8号溝から出土している。15～19は石鍋である。15・16は罫が口縁よりやや下った位置にあるものである。15は13号溝から出土している。16は内外面にノミ痕が残る。12号溝から出土している。17・18は口縁直下に罫が付くものである。内外面にノミ痕が残る。17は11号溝から出土している。18は13号溝から出土している。19は底部片である。内外面にノミ痕が残る。12号溝から出土している。

矢加部五反田遺跡

矢加部五反田遺跡は柳川市の北部、標高約3.0mに位置する。先述した矢加部南屋敷遺跡は西鉄大牟田線を挟んで東側に近接するが、本遺跡は矢加部南屋敷遺跡より標高が約0.5m低くなっている。周辺は大規模な沖積地で、現在では高低差を感じることはできないが、現在の集落が展開する北東側がわずかに高くなっている。この付近の小字名が「五反田」と呼ばれていることから、水田として利用されていた可能性が予想された。

遺構面は地表面から約0.3mのほぼ耕土直下とあってよい深さより検出され、淡茶褐色粘質土の遺構面が広がっていた。遺構の埋土は淡黒褐色に近いものが多く、検出は比較的容易であった。遺構は中世後期の溝4条、ピット多数を検出している。水田耕作に利用された溝の可能性を考えていたが、集落に近い東側の1・2号溝は比較的生活関連の遺物の出土が多く、集落が東側の線路付近まで広がっていた可能性もある。

(1) 溝

1号溝 (図版28、第40図)

調査区の東端部で検出した。南北に延びる溝で、両端は調査区外へ延びる。2号溝を切る。断面は幅295cm、深さ50cmの逆台形を呈する。埋土は淡黒褐色粘質土であり、底面は滞水のためか青変していた。



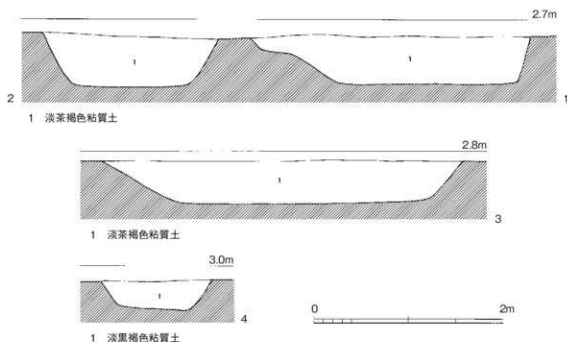
第39図 矢加部五反田遺跡遺構配置図 (1/600)

出土土器（図版30、第41・42図）

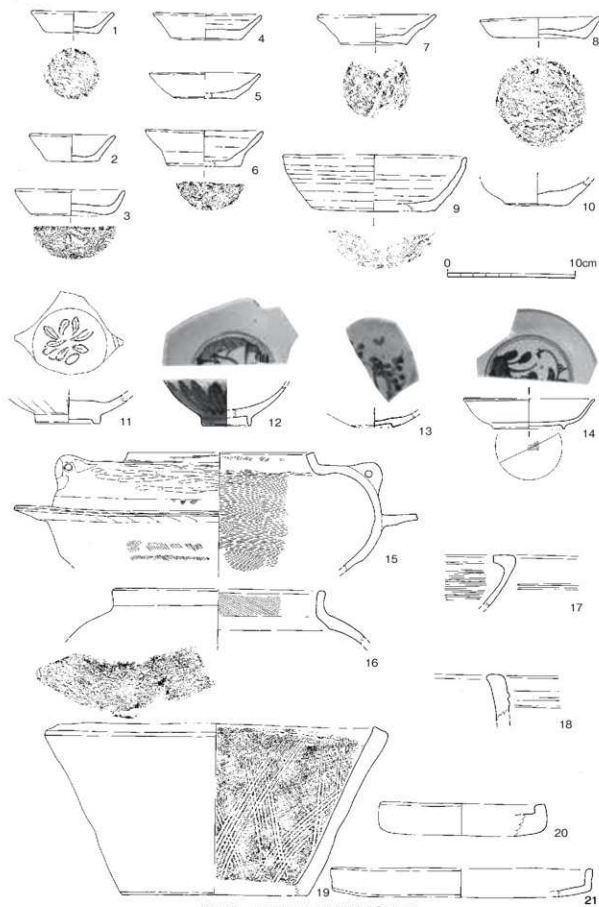
1～8は土師質の小皿である。磨減しているものもあるが、すべて糸切りの底部であろう。内外面の調整はナデである。9は土師質の杯である。糸切りの底部で、内湾する胴部には比較的強い段が付く。11は外面鑄蓮弁、内面には花文を描く。高台内、疊付の部分は露胎である。12は小形の青花碗である。俗に蓮子碗といわれるもので、外面には芭蕉文、内面にも何らかの文様が描かれる。13は青花の小皿である。萼筒底で、見込には枝と鳥の文様が描かれる。14は青花の皿で、見込に植物が描かれる。高台には銘がある。15・16は瓦質の湯釜である。15の肩部はミガキである。外面にはススが附着する。16の肩部には花文がスタンプされる。17は瓦質の火鉢であろう。外面に沈線が巡る。18は瓦質の火鉢で、深鉢であろう。外面に2条の突帯が巡る。20の器種は不明である。瓦質で底部が18mmと厚い。21の器種も不明である。土師質である。22は捏鉢である。瓦質で内外面の調整はハケメである。23～30は土鍋である。23～27は素口縁で端部を肥厚させる。28・29は玉縁口縁で肥前に多くみられるものである。30は耳鍋で2ヶ所の穿孔があり、外面下部に耳が付く。

2号溝（図版28、第40図）

調査区の東端部で検出した。南北に延びる溝で、両端は調査区外へ延びる。1号溝に切られる。断面は幅185cm、深さ55cmである。埋土は淡黒褐色粘質土であり、底面は滞水のためか青変していた。



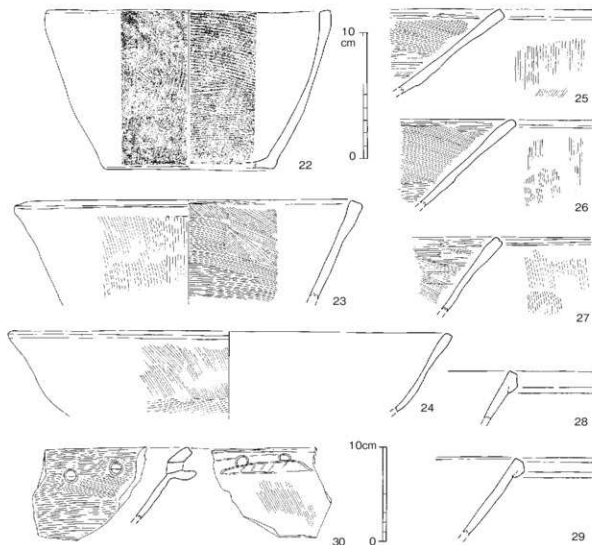
第40図 1～4号溝土層実測図（1/40）



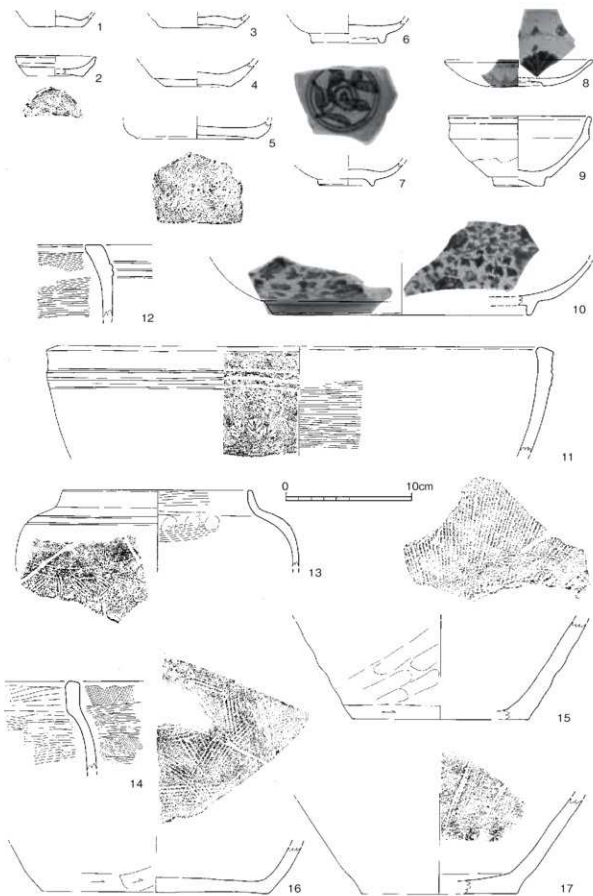
第41图 1号沟出土土器实测图①(1/3)

出土土器 (図版30、第43・44図)

1～4は土師質の小皿である。1の内外面および底部はナデ調整である。2は糸切り底である。5は土師質の杯である。底部は糸切り底である。6は青磁である。見込は施釉後、掻きとって露胎にしている。高台内も施釉後、削って露胎としている。畳付には釉薬がかけられる。7は青磁である。見込に濃緑色で花文が描かれる。畳付の部分は露胎である。8は碁筒底の皿である。外面には芭蕉文、見込には花文が施される。9は天目茶碗である。口縁は途中で屈曲するが直線的に上方へ伸びる。胴部下位は露胎である。10は青花の大口である。内外面には草花文が描かれる。11・12は火鉢である。11の外面は3条の沈線と草文のスタンプである。13・14は湯釜である。外面には2条の沈線と草文が描かれる。14の内外綿の調整はハケメである。15～17は播鉢である。15は外面に強いナデ痕が残る。内面の播目は密に施される。16の外面底部付近はケズリである。内面底部の播目は不定方向である。17は粗い播目が施される。外面にススが一部付着しており、煮焚きで使用された可能性もある。18～26は土鍋である。いずれも口縁が外側に肥厚するもので、内外面の調整はハケメである。外面にはススが付着しており、実際に使用されたものである。21は他のものより大き



第42図 1号溝出土土器実測図② (24は1/4、他は1/3)



第43图 2号沟出土土器实测图① (1/3)

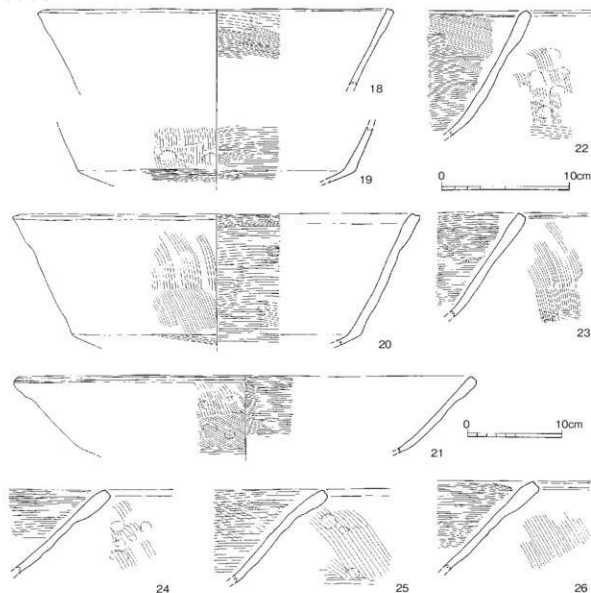
く浅い。

3号溝 (図版28、第40図)

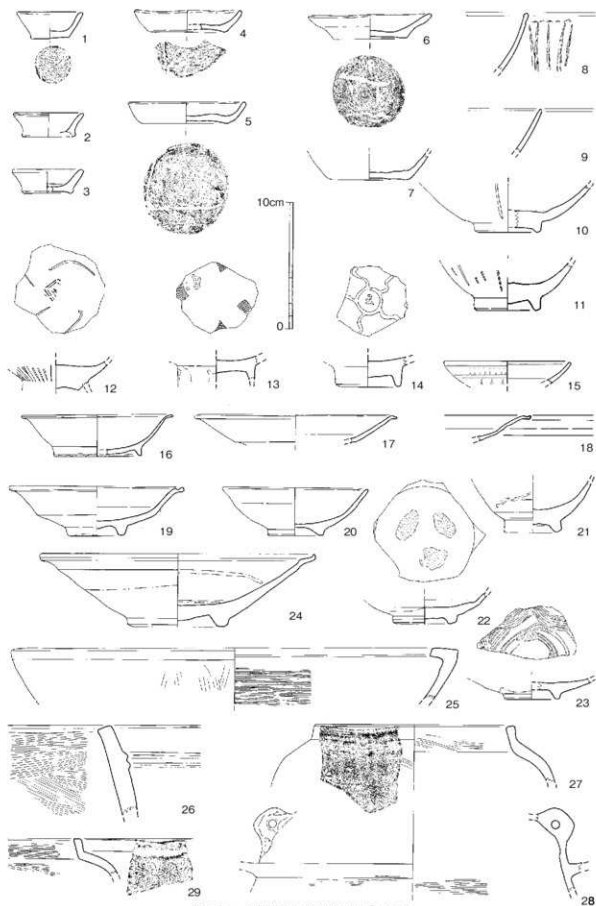
調査区の中央部で検出した。南北に延びる溝で、両端は調査区外へ延びる。断面は幅385cm、深さ45cmである。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (図版30・31、第45・46図)

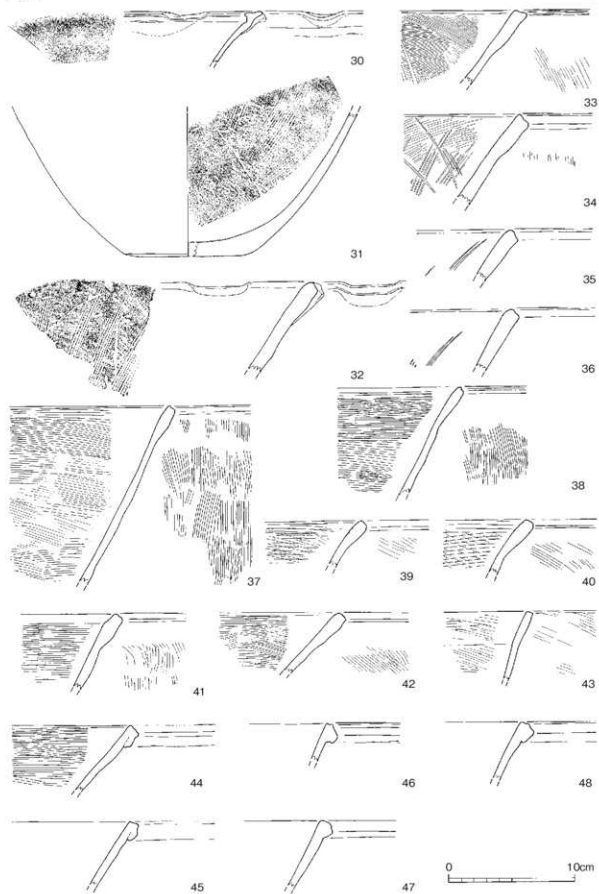
1～7は土師質の小皿である。1は深めのもので、口縁が直線的に広がる。内外面の調整はナデである。底部は糸切りである。5の口縁はわずかに内湾する。底部は糸切りである。6の口縁はわずかに外反する。内外面の調整はナデで、底部は糸切りである。8～14は青磁の碗である。8は青磁の碗で外面に簡略化された蓮弁文が刻まれる。9にも蓮弁文が刻まれるようであるが不明瞭である。釉薬の発色は悪い。19は陶器の皿である。口縁端部上面に溝を巡らす、いわゆる溝縁皿である。赤褐色の胎土に白灰色の釉薬を薄くかけている。畳付の部分は部分的に露胎である。



第44図 2号溝出土土器実測図② (21は1/4、他は1/3)



第45图 3号溝出土土器实测图① (1/3)



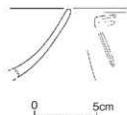
第46图 3号沟出土土器实测图②(1/3)

4号溝 (図版29、第40図)

調査区の西端部で検出した。南北に延びる溝で、両端は調査区外へ延びる。断面は幅115cm、深さ30cmである。埋土は淡黒褐色粘質土であった。

出土土器 (第47図)

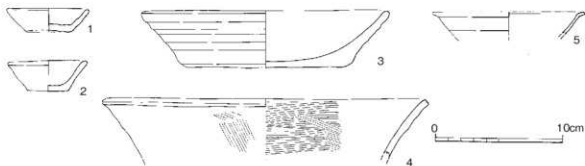
1は青磁の碗である。やや厚めの器壁で、外面には文様が刻まれる。淡緑色の釉薬が厚く塗られる。



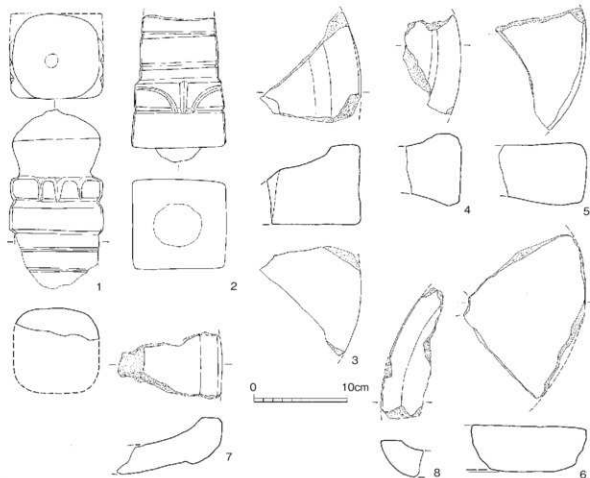
第47図 4号溝出土土器実測図 (1/3)

ビット出土土器 (図版31、第48図)

1は土師質の小皿である。内面にナデの痕跡が残る。2は深めの小皿である。口縁端部がわずかに



第48図 ビット出土土器実測図 (1/3)



第49図 出土石製品実測図 (1/4)

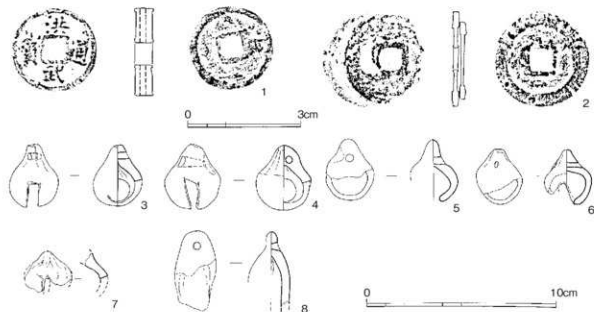
に外反する。やや器壁が厚い。3は杯である。内外面にナデの痕跡が残る。4は口縁がわずかに外反する土鍋である。外面の調整は斜め方向の刷毛目である。内面の調整は横方向のハケメである。外面にはススが附着する。

出土石製品 (図版31、第49図)

1は凝灰岩製の宝篋印塔の相輪の上半部である。方柱状で宝珠の下部に縦方向に刻みを入れることにより請花を表現している。その下位は水烟であろうか。何も表現されていない。九輪は3段目まで残る。2は凝灰岩製の宝篋印塔の相輪の下半部である。方柱状で九輪の下3段目までが残る。請花は中央の縦刻みと2本の弧線で表す。その下位の無文の部分は伏鉢であろうか。下面には組み合わせのための突起がある。3は凝灰岩製の上臼である。歪みのため直径は不明である。上面端部には突起が巡り、中央付近には供給口とみられる掘り込みがある。底面にはわずかに溝の痕跡が残る。4は気泡の多い凝灰岩製の上臼である。上面端部には突起が巡る。底面には使用により、中央に向かって大きく擦り減っている。底面に溝は見られない。5は凝灰岩製の下臼である。上面はわずかに溝の痕跡が残る。底面の調整は粗い。6は凝灰岩製の下臼である。上面はわずかに溝の痕跡が残る。中央には芯棒穴がある。底面の調整はやや粗い。7は凝灰岩製の下臼の受けの部分である。内面は丁寧な造りであるが、底面は極めて粗い。8は凝灰岩製の下臼の受けの部分である。内面は丁寧な造りであるが、底面にはノミ痕が残る。

出土特殊遺物実測図 (図版31、第50図)

1は洪武通寶である。境目は肉眼で確認できないが、厚さから3枚が密着しているようである。1368年の初鋳である。3号溝出土である。2は銭種不明である。2枚の表面同士が接着している。3号溝出土である。3～8は土鈴である。いずれも外面はナデ調整である。内部に土玉が残っているものもある。3は1号溝出土である。4は3号溝出土である。5は1号溝出土である。6は2号溝出土である。7は3号溝出土である。8は1号溝出土である。



第50図 出土特殊遺物実測図 (1・2は1/1、他は1/2)

IV まとめ

矢加部南屋敷遺跡は中世から近世にかけての集落遺跡であり、今回の調査で検出したのは、矢加部南屋敷遺跡で、掘立柱建物1棟、木棺墓1基、土坑墓1基、土坑11基、溝19条、ピット多数である。矢加部五反田遺跡では溝4条、ピット多数を検出している。以下、両遺跡の時期ごとに概観していきたい。

矢加部南屋敷遺跡

弥生時代

遺跡内では遺構は検出されなかったが、4号土坑から弥生土器と石庖丁が出土している。遠隔地から客土とともに運ばれてきた事も考えうるが、周囲に弥生時代の遺跡がある可能性も残る。

13世紀代

遺跡内でも最も古い遺物の出土している遺構は11号溝、12号溝で13世紀代のものと考えられる。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、14号溝が11号溝に切られるので、更にさかのぼるものであろう。

15～16世紀代

13号溝、16号溝が該当する。13号溝は幅750cmと極めて幅が広い割には、深さが60cmと浅い。16号溝に至っては、検出した幅が1,080cmであるが、東側の立ち上がりは検出できず、広がる。ただし、こちらも深さ90cm程である。用途は不明であるが、現在のクリークと同様の役割を果たしていたものと考えておきたい。

17世紀代

15号溝の出土遺物が該当する。近接する8号溝と15号溝の交点は、他の掘り込みにより切られるが、15号溝と軸を同じくし、幅、断面形も似通っていることから、これらが区画溝であった可能性が高い。この区画を復元すると東西約20m、南北27m + α の長方形の区画になる。同様の区画が、東西に展開しているようである。15号溝西側の区画には多数のピットが検出されており、建物の存在が予想される。今回の調査範囲の中で建物として認識できたのは1号掘立柱建物のみである。ただし、他にピットの密集する部分もあり、調査担当者の認識不足で、検出できていない建物も多数あると考えられる。この1号掘立柱建物は遺物が出土していないため、時期は不明であるが、8号溝及び15号溝と軸を同じくすることから、区画内の建物と考えている。また、1号木棺墓、1号土坑墓も溝と軸を同じくすることから、区画の中の屋敷墓と考えられる。

19世紀以降

4号土坑、9号土坑があげられる。いずれも廃棄土坑と考えられる。11号土坑は大きさから日常的な廃棄土坑であると考えられる。しかし、4号土坑は東西580cm、南北480cmと巨大であり、日常的とは考えにくく、家屋等の移転時に不要なものを一括して投棄したものであろうか。19号溝は19世紀中頃以降の遺物が比較的まとまって出土している。

石塔について

石塔の類は18点が出土している。いずれも凝灰岩製であり、石材の材質が弱いためであろうか欠損しているものも多い。また、一部には破損後、被熱を受けたものもある。出土位置は2号溝で7点、1号溝で2点、3号溝で2点、7号溝で1点、13号溝で3点、19号溝で1点であり、特に遺跡の西側部分に集中している。種類としては、宝篋印塔の相輪部分が2点、笠部分が1点、五輪塔の

空風輪部分が5点、火輪部分が3点、水輪部分が6点、地輪1点が出土している。また、矢加部五反田遺跡でも、宝篋印塔の相輪部分が2点出土している。全てが組み合わせると想定しても、9基以上の石塔が矢加部南屋敷遺跡の西側部分に存在していたと思われる。ただし、この付近において墓坑を検出しておらず、もともと調査区の近辺に建ててあったものが、何らかの理由でこれらの溝に埋没したのと考えられる。

矢加部五反田遺跡

15～16世紀代

まず、2号溝が掘削された後、1号溝が掘削されている。方向、幅もほぼ同規模であり、用途としては同じであったと考えられる。1・2号溝東側でピット群が見られること、遺物の出土も多いことから生活域に近い溝であったと思われる。

17世紀代

1・2号溝より新しい遺物が出土していることから、17世紀代の溝であると判断した。遺物もやや出土していることから、生活域の端部であり、これより西は水田耕作等に利用されていたと考えている。なお、4号溝は遺物がほとんど出土していないため、水田耕作等に関連する溝と考えているが、埋土から判断して1～3号溝と近い時期に掘削、利用されていたものと考えている。

矢加部の地名について

今回調査を行った「矢加部」については下記の記録が残されている。

[増長天後頭部墨書／崇久寺]

(増長天) 後頭部墨書 「弘治戊午／再興作者／矢賀部住／法真 士珍」

面部割矧部墨書「弘治戊午／再興作者／士珍／旦那上様」

○参考『崇久寺略縁起』より

「臨立増長、多聞ノ二天王ハ弘治四年、蒲池武蔵野守鑑盛夫人、佛工士珍ニ命シテ之ヲ修理セシメタリ、木牌ノ銘ニ曰ク南瞻部州西海道筑後国三潯郡蒲池村凌雲山崇久禪寺、増長、多聞天王之二天、円通宝殿本尊十一面観音之臨立也、作者頭中記其名、年代不詳弘治四戊午年、蒲池武蔵野守鑑盛夫人、命于佛工士珍、膠漆之、彩色之、(下略)」

東蒲池に所在する崇久寺はこの地域で隆盛を極めた蒲池氏一族の墓があり、蒲池氏に関する様々な品が残されている。その一つである増長天の後頭部には、弘治四（1558）年、蒲池鑑盛夫人の依頼により矢賀部住の仏師法真士珍によって修理がなされている。この矢賀部が現在の矢加部周辺のことであれば、16世紀中頃、遺跡の存在した時期に既にこの付近が「ヤカベ」と呼ばれていたと考えて差し支えないであろう。

また、蒲池氏に関係する集落であれば、一般の集落に比べ本遺跡で出土した15～16世紀の貿易陶磁器の出土点数が比較的多いことや、宝篋印塔を含む石塔群の存在も理解しやすいのではないだろうか。

『柳川市史 資料編Ⅲ 蒲池氏・田尻氏史料』柳川市史編集委員会 2006

『新 柳川名称図会』柳川市史編集委員会・別編部会 2002

第2表 矢加部南屋敷遺跡出土土器

遺構名 基壇番号 取版番号	器種 形状 通称名	注量 口径 口径 底径	胎の種類 胎の特徴	釉薬	調整・整形・裝飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	鑑定産地	鑑定年代
1号木棺第1	小皿 かわらけ	口径9.8 口径5.3 底径4.2	灰黄色 粗砂粒を含む	-	内外面はナテ調整底部は糸切り	-			
1号木棺第2	小皿 かわらけ	口径9.9 口径5.9 底径4.2	灰褐色 粗砂粒を含む	-	内外面はナテ調整	-			
4号土坑1	瓶青磁	口径9.6 口径5.8 底径4.0	灰白色	緑白色	外面に蓮弁文見込に草花文あり	高台内に支え跡	混入か	中国産	
4号土坑2	瓶青磁	口径9.4 口径4.2 底径	灰黄色	淡黄緑色の透明釉	頸付及び高台内は露胎				近畿か
4号土坑3	瓶青磁	口径9.7 口径4.7 底径	灰黄色	灰黄緑色	頸付及び高台内は露胎				近畿か
4号土坑4	広東陶 磁器	口径11.8 口径7.1 底径6.1	白灰色	青灰色	外面に耀の文様	-		肥前系	19世紀
4号土坑5	海防陶 磁器	口径11.4 口径4.6 底径5.7	白灰色	白灰色	二重格子文	全面施釉		肥前系	19世紀
4号土坑6	広東陶 磁器	口径16.0 口径6.0 底径	灰白色	灰白色	見込に文様あり	全面施釉			
4号土坑7	筒形陶 磁器	口径9.0 口径4.1 底径5.4	灰白色	灰色	外面に草文 見込にコシニヤク印刷五分花文	全面施釉		渡佐見	18世紀
4号土坑8	筒形陶 磁器	口径9.4 口径4.1 底径5.5	灰色	青灰白色	外面に草花文 見込にコシニヤク印刷五分花文	全面施釉		渡佐見	18世紀
4号土坑9	頸口 磁器	口径16.2 口径4.8 底径	灰白色	青灰白色	外面に花文が描かれる	全面施釉		肥前系	18世紀
4号土坑10	皿 磁器	口径9.0 口径9.0 底径	白色	白色の透明釉	-	純ノ目凹形高台			
4号土坑11	皿磁器	口径9.7 口径4.4 底径	灰白色	青灰白色	純ノ目凹形高台皿であるが全面に施釉	-			
4号土坑12	豆形陶 磁器	口径7.5 口径4.4 底径3.9	白灰色	白灰色	内外面の調整はナテ 外面に斜格子文	全面に施釉		肥前系	18～19世紀
4号土坑13	香印 陶器	口径7.2 口径4.2 底径	灰褐色	黒色	内外面の調整はナテ	底部は露胎			
4号土坑14	瓶 磁器	口径11.6 口径5.6 底径	灰色	青灰白色	草花文が描かれる	-		肥前系	18～19世紀
4号土坑15	瓶 磁器	口径9.7 口径4.4 底径	灰白色	灰白色	胡蝶草が描かれる	-		肥前系	19世紀
4号土坑16	茶 陶器	口径9.7 口径4.0 底径3.7	灰黄色	こげ茶色	内外面の調整はナテ	内面は露胎			
4号土坑17	不明	口径18.0 口径7.0 底径	黒灰色	-	-	-		瓦質	
4号土坑18	器 陶器	口径10.0 口径10.0 底径	淡黄赤色	黒褐色	内外面ともにナテ調整	頸付部分は露胎	横方向に口縁 が付く		
4号土坑19	養生土器	口径40.0 口径38.0 底径	黄褐色粗砂粒 を含む	-	内外面の調整は横方向のミガキ	-	混入		発生前期末
9号土坑1	皿 磁器	口径21.8 口径12.3 底径11.5	灰色	淡灰青色	内外面に文様あり 高台内に「反」銘あり	頸付部分は露胎			近代
1号溝1	瓶 青磁	口径9.7 口径4.0 底径	淡灰黄色	淡灰黄色	見込に文様あり 頸付・高台内は露胎	-	混入か	中国産	
1号溝2	瓶 青磁	口径9.7 口径4.0 底径	淡灰色	淡灰緑色	頸付・高台内は露胎	-			
1号溝3	火鉢	口径9.7 口径4.0 底径	灰色	-	外面に花文のスタンプ 2条の突起	-		瓦質	
1号溝4	土鍋	口径9.7 口径4.0 底径	暗灰茶褐色	-	内外面ともにナテ調整 外面に圧痕が残る	-			
1号溝5	壺?	口径10.6 口径7.6 底径	灰色	-	外面には竹管文と雷文あり 内面には強いナテ痕	-		瓦質	
2号溝6	小皿 かわらけ	口径6.7 口径4.7 底径4.8	灰黄色	-	内外面はナテ調整 底部に焼成前の穿孔	-			
2号溝7	杯 かわらけ	口径11.8 口径8.2 底径2.7	淡灰白黄色	-	内外面の調整はナテ	-			
2号溝8	杯 かわらけ	口径10.2 口径6.4 底径3.5	淡赤灰黄色	-	内外面の調整はナテ 底部は糸切り、板状圧痕	-			
2号溝9	杯 かわらけ	口径16.0 口径6.0 底径	淡黄褐色	-	内外面の調整はナテ	-			
2号溝10	瓶 青磁	口径9.8 口径5.8 底径	灰色	淡緑色	頸付・高台内は全て施釉	-		中国産	
2号溝11	火鉢	口径9.7 口径4.0 底径	黒色	-	外面はナテ調整 内面は横方向のハケメ	-			
2号溝12	土鍋	口径9.7 口径4.0 底径	黒灰色	-	内外面ナテ調整	-		外面にスガ が付着	
2号溝13	土鍋	口径40.0 口径38.0 底径	灰色	-	内外面ともにハケメ 部分的に強い圧痕あり	-		外面にスガ が付着	
3号溝14	小皿 かわらけ	口径6.2 口径4.4 底径1.6	灰黄色	-	底部は糸切り	-			

3号講15	小皿 かわらけ	1219 表径3.6 器高	灰青茶色	-	内外面の調整はナデ	-		
3号講16	小皿 かわらけ	1219 表径5.5 器高	灰青褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
3号講17	杯 かわらけ	1219 表径5.5 器高	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
3号講18	杯 かわらけ	1219 10.3 表径5.6 器高	赤褐色	-	底部分厚い 底部は希切り	-		
3号講19	小皿 かわらけ	1219 表径6.0 器高	灰青茶色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-		
3号講20	小皿 かわらけ	1219 表径6.2 器高	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-		
3号講21	火鉢	1219 表径 器高	黒灰色	-	外面に花文のスタンプ	-		
3号講22	土鍋	1219 表径47.6 器高	黒灰色	-	内外面ともにハケメ 部分的に強い圧痕あり	-	外面にスガが 付着	
4号講1	小皿 かわらけ	1219 表径4.5 器高1.1	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
4号講2	小皿 かわらけ	1219 表径5.3 器高1.4	白灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-		
4号講3	小皿 かわらけ	1219 表径5.3 器高2.1	灰褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
4号講4	小皿 かわらけ	1219 表径5.4 器高2.9	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
4号講5	小皿 かわらけ	1219 表径6.2 器高	白灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
4号講6	杯 かわらけ	1219 12.7 表径3.9 器高	灰青褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-	底部に黒鉄あり	
4号講7	杯 かわらけ	1219 11.2 表径3.2 器高	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-		
4号講8	杯 かわらけ	1219 12.4 表径3.2 器高	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
4号講9	杯 かわらけ	1219 13.2 表径4.2 器高	暗茶褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は希切り	-		
4号講10	横青磁	1219 14.6 表径 器高	灰色	淡青灰色	外面に簡略化した蓮弁文が描かれる	-		中国産
4号講11	横青磁	1219 15.6 表径 器高	灰色	暗緑色	口縁端部がわずかに外反する	-		中国産
4号講12	横青磁	1219 16.0 表径 器高	暗灰色	淡暗緑色		-		中国産
4号講13	横青磁	1219 15.1 表径 器高	灰色	淡緑色	内面に草文が描かれる	畳付まで施軸		中国産
4号講14	横青磁	1219 表径5.0 器高	灰色	淡青緑色	内面に草文が描かれる	畳付まで施軸		中国産
4号講15	横白磁	1219 表径 器高	白色	白色	口縁端部がわずかに外反する	-		中国産
4号講16	置陶器	1219 12.2 表径5.6 器高3.2	淡赤褐色	白灰色	外面下半はほぼ露胎	靴ノ目軸貫ぎ		
4号講17	漆鉢	1219 25.6 表径 器高	灰青褐色	-	内外面の調整はナデ	-	瓦貫	
4号講18	漆鉢陶器	1219 30.4 表径15.4 器高10.3	灰色	-	内外面の調整はナデ 8本単位の花文のスタンプ	-	備前	
4号講19	火鉢	1219 表径29.0 器高	灰色~黒灰色	-	外面は2条の帯帯と菱形のスタンプ 内面の調整はハケメ	-	瓦貫	
5号講1	小皿 かわらけ	1219 6.6 表径4.5 器高2.2	白灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
5号講2	杯 かわらけ	1219 12.0 表径7.2 器高3.8	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部に板状生痕が残る	-		
5号講3	杯 かわらけ	1219 12.4 表径6.3 器高4.2	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-		
5号講4	横青磁	1219 表径5.9 器高	灰色	明緑色	輪業が厚くかけられる	畳付にも施軸		中国産
5号講5	横青磁	1219 表径6.4 器高	灰色	淡緑色	底部が厚い 畳付から高台内は露胎	-	断面が鋭熱	中国産
5号講6	横青磁	1219 表径5.8 器高	暗灰色	暗黄茶色	畳付から高台内は露胎	-		中国産
5号講7	湯釜	1219 13.6 表径 器高	黒色	-	内面は横方向のハケメ 外面は縦方向のハケメ 肩部に花文のスタンプ	-	瓦貫肩部に穿 孔	
5号講8	湯釜?	1219 11.6 表径 器高	灰色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	割裂種の可能性も あり	
5号講9	土鍋	1219 33.0 表径 器高	灰黄色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	外面にスガが 付着	肥前系
7号講10	横青磁	1219 15.6 表径 器高	灰色	暗緑色	口縁端部が外側に肥厚する	-		中国産
8号講1	横青磁	1219 表径 器高	灰色	暗緑色		-		中国産

8号講2	襷青磁	口徑 直径 高さ	灰色	暗緑色	外面に鑲造芥文が施される	-	中国産
8号講3	襷青磁	口徑 直径 高さ4.4	灰色	暗緑色	雲付・高台内も施される	-	軸が厚い 中国産
8号講4	襷青磁	口徑 直径 高さ7	暗灰色	淡緑色	見込に花文が描かれる	-	雲付部分は 高胎 中国産
8号講5	襷青磁	口徑 直径 高さ4.2	灰白色	淡黄緑色	見込に文様が描かれる	-	雲付部分は 高胎 中国産
8号講6	天目	口徑 直径 高さ4.4	淡黄褐色	黒褐色	高台内は削り出し	-	高台内に墨書 あり 中国産?
8号講7	瀟灑	口徑16.6 直径 高さ	灰褐色	-	内外面ともにハケメ	-	瓦質
8号講8	瀟灑	口徑15.0 直径 高さ	灰褐色	-	内外面ともにハケメ	-	瓦質
8号講9	瀟灑	口徑16.4 直径 高さ	灰褐色	-	外面はナデ調整 内面は横方向のハケメ	-	瓦質
8号講10	瀟灑	口徑19.0 直径 高さ	灰褐色	-	外面はナデ調整 内面は横方向のハケメ	-	瓦質
8号講11	狸鉢	口徑20.8 直径 高さ	灰色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	瓦質
8号講12	土鍋	口徑 直径 高さ	灰黄色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	
8号講13	嬰 陶器	口徑 直径 高さ	灰色	-	内外面の調整はナデ 突帯を連続して直し文様とする	-	
8号講14	小皿 かわらけ	口徑16.6 直径 高さ2.5	黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講1	小皿 かわらけ	口徑16.0 直径 高さ1.7	黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-	
11号講2	小皿 かわらけ	口徑16.3 直径 高さ1.3	黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講3	小皿 かわらけ	口徑16.3 直径 高さ1.3	灰黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-	
11号講4	小皿 かわらけ	口徑16.9 直径 高さ	黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-	
11号講5	小皿 かわらけ	口徑17.0 直径 高さ1.8	灰褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講6	小皿 かわらけ	口徑19.3 直径 高さ1.7	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講7	杯 かわらけ	口徑 直径 高さ7.2	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講8	杯 かわらけ	口徑 直径 高さ8.9	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講9	杯 かわらけ	口徑13.1 直径 高さ5.5	黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り、板状圧痕が残る	-	
11号講10	杯 かわらけ	口徑13.4 直径 高さ5.7	灰黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講11	杯 かわらけ	口徑 直径 高さ9.8	白黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講12	杯 かわらけ	口徑14.0 直径 高さ3.6	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講13	杯 かわらけ	口徑 直径 高さ9.4	灰黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-	
11号講14	杯 かわらけ	口徑14.2 直径 高さ2.9	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講15	杯 かわらけ	口徑14.4 直径 高さ10.0	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講16	杯 かわらけ	口徑14.4 直径 高さ2.6	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
11号講17	杯 かわらけ	口徑14.8 直径 高さ3.5	灰褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
12号講1	小皿 かわらけ	口徑16.4 直径 高さ1.3	黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
12号講2	杯 かわらけ	口徑16.5 直径 高さ3.1	茶褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は板状圧痕が残る	-	
12号講3	襷青磁	口徑15.3 直径 高さ	灰色	暗緑色	外面に鑲造芥文が施される	-	中国産
12号講4	襷青磁	口徑 直径 高さ3.3	灰色	灰黄緑色	外面に鑲造芥文が施される 雲付から高台内は施される	-	中国産
12号講5	襷青磁	口徑16.0 直径 高さ4.2	黄灰色	灰黄緑色	外面に鑲造芥文が施される 見込には「金玉調家」	全面に施軸	中国産
12号講6	狸鉢	口徑22.7 直径 高さ10.4	青灰色粗砕粒 を少量含む	-	内外面の調整はナデ	-	歪み大きい 東播系
13号講1	小皿 かわらけ	口徑16.8 直径 高さ2.6	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-	
13号講2	小皿 かわらけ	口徑16.8 直径 高さ2.3	灰黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-	

13号講3	小皿 かわらけ	□197.1 底径1.0 器高1.8	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講4	小皿 かわらけ	□197 底径6.0	白灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講5	小皿 かわらけ	□198.7 底径6.0 器高1.5	灰色~暗灰色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講6	小皿 かわらけ	□198.8 底径5.9 器高2.3	淡白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講7	小皿 かわらけ	□197 底径6.4	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講8	小皿 かわらけ	□199.3 底径5.5 器高2.5	茶褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
13号講9	杯 かわらけ	□1910.1 底径6.7 器高3.6	灰黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講10	杯 かわらけ	□197 底径6.3 器高	黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り。板状圧痕が残る	-		
13号講11	杯 かわらけ	□1911.6 底径4.6 器高3.4	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
13号講12	甌 青磁	□197 底径5.8 器高	灰色	暗緑色	見込に文様あり	畳付にも縁	中国産	
13号講13	甌 青磁	□197 底径5.2 器高	灰色	灰緑色	貫入あり	畳付にも縁	中国産	
13号講14	甌 青磁	□197 底径4.8 器高	白黄灰色	白緑灰色	菊花状に整形する	畳付にも縁		
13号講15	甌 青磁	□197 底径4.6 器高	白灰色	緑灰色	見込に花文の文様あり	畳付にも縁	中国産	
13号講16	甌 青磁	□197 底径5.0 器高	灰色	緑灰色	外周に磨略化した唐弁文が描かれる	付着物が多い	中国産	
13号講17	甌 青磁	□1910.4 底径	灰色	緑灰色	高台内中心部分の軸を掻き取る		中国産	
13号講18	甌 青磁?	□197 底径4.3	灰色	白色	-	畳付のみ露胎	発色が悪い?	
13号講19	甌 青磁?	□197 底径4.3	灰色	灰白色	高台部分が厚い	-	発色が悪い?	
13号講20	甌 青磁?	□197 底径5.1	淡茶色	白灰色	見込に「正」と花文の組み合わせ文	高台内露胎	発色が悪い?	
13号講21	甌 青花	□199.8 底径5.2 器高2.4	白灰色	白灰色	見込に花文外周に植物文	畳付のみ露胎	中国産	
13号講22	甌 青花	□199.4 底径5.5 器高2.5	白灰色	灰黄緑色	見込に花文	-	中国産	
13号講23	甌 青花	□194.3 底径	白色	乳白色	見込に文様あり	畳付のみ露胎	中国産	
13号講24	甌 青花	□199.2 底径4.4 器高2.2	白灰色	白灰色	見込に花文 外周に植物文	畳付のみ露胎	中国産	
13号講25	甌 青花	□1910.0 底径	白色	乳白色	基胎底 外周に唐文	-	中国産	
13号講26	甌 青花	□199.4 底径4.6 器高2.4	灰白色	灰白色	基胎底見込に花文 外周に唐文	畳付のみ露胎	中国産	
13号講27	甌 青花	□197 底径3.0	白灰色	白灰色	基胎底 見込に草花文 外周に唐文	畳付のみ露胎	中国産	
13号講28	甌 青花	□1911.6 底径4.0 器高2.8	白灰色	白灰色	基胎底 内外面に文様あり	畳付~高台内 露胎	中国産	
13号講29	甌 青花	□1912.4 底径	白灰色	白灰色	-	-	中国産	
13号講30	甌 白磁	□1911.6 底径5.8 器高3.1	灰色	灰色	-	畳付のみ露胎	中国産	
13号講31	甌 白磁	□199.0 底径4.4 器高2.5	白色	乳白色	-	畳付のみ露胎		
13号講32	甌 陶器	□1910.4 底径5.8 器高2.7	白黄灰色	白黄灰色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付~高台内 露胎		
13号講33	甌 陶器	□1913.8 底径4.3 器高3.0	灰色	灰黄緑色	-	目跡が3か所		
13号講34	甌 陶器	□1911.0 底径4.4 器高3.5	灰褐色	灰緑色	器裡が厚い	目跡あり		
13号講35	甌 陶器	□1911.0 底径4.0 器高3.3	淡褐色	灰緑色	底部付近露胎	-		
13号講36	甌 陶器	□194.4 底径	灰色	灰緑色	-	-		
13号講37	甌 陶器	□194.2 底径	灰色	灰色	-	目跡あり		
13号講38	甌 陶器	□1914.4 底径6.4 器高3.1	白黄灰色	灰黄緑色	見込は露胎	畳付~高台内 露胎		
13号講39	甌 陶器	□1910.1 底径4.0 器高4.9	淡黄褐色	淡黄褐色の透明釉	-	畳付~高台内 露胎		
13号講40	種鉢 陶器	□1928.6 底径	褐色	紫褐色	内外面の調整はナデ 内面に8本単位の窪目	-	備前か	

13号溝41	襦袢 胸袋	□19 選注 11.6 色高	灰色～橙褐色	-	内外面の調整はナデ 内面に7本単位の襟目	-		
13号溝42	襦袢	□19 選注 30.0 色高	黒色	-	内外面の調整はナデ 内面に7本単位の襟目	-	瓦買	
13号溝43	襦袢	□19 選注 27.3 選注 24.4 色高 13.0	灰色～黒灰色	-	内外面の調整はナデ 内面に交差する襟目	-	瓦買	
13号溝44	襦袢	□19 選注 15.0 色高	灰色～黒色	-	内面に9本単位の襟目	-	瓦買	
13号溝45	襦袢	□19 選注 13.4 色高	灰色～黒色	-	外面はハケメの後、ナデ内面は襟目	-	瓦買	
13号溝46	襦袢	□19 選注 26.0 色高	黒色	-	内外面はナデ調整 内面に8本単位の襟目	-	瓦買	
13号溝47	襦袢	□19 選注 27.0 色高	黒色～黒灰色	-	外面はナデ調整 内面はハケメの後、襟目	-	瓦買	
13号溝48	襦袢	□19 選注 32.0 色高	灰色～淡橙褐色	-	外面はナデ調整 内面はハケメの後、襟目	-	瓦買	
13号溝49	襦袢	□19 選注 34.4 色高	灰色～暗灰色	-	外面はナデ調整 内面はハケメの後、襟目	-	瓦買	
13号溝50	襦袢	□19 選注 34.0 色高	灰色～白黄褐色	-	外面はナデ調整 内面はハケメの後、4本単位の襟目	-	瓦買	
13号溝51	襦袢	□19 選注 32.0 色高	暗灰色	-	内面に10本単位の襟目	-	瓦買	
13号溝52	土鍋	□19 選注 40.0 色高	こげ茶色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にスガが 付着	
13号溝53	土鍋	□19 選注 39.0 色高	黒色～灰黄色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にスガが 付着	
13号溝54	土鍋	□19 選注 48.6 色高	白黄色	-	内外面の調整はハケメ	-		
13号溝55	土鍋	□19 選注 46.8 色高	灰黄褐色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にスガが 付着	
13号溝56	土鍋	□19 選注 44.0 色高	白黄色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にスガが 付着	肥前系
13号溝57	蓋	□19 選注 11.4 選注 10.0 色高 1.3	暗灰色	-	内外面の調整はナデ	-	瓦買	
13号溝58	帯 胸袋	□19 選注 11.6 色高	褐色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はタタキの後、ナデ	-		
13号溝59	裏 土鍋器	□19 選注 18.8 色高	白黄褐色	-	内外面の調整はハケメの後、ナデ	-	混入	
13号溝60	裏 胸袋	□19 選注 23.0 色高	淡黄褐色	-	内外面の調整はハケメ	-	内面にスガが 付着	
13号溝61	湯釜	□19 選注 15.0 色高 29.8	灰黄色～灰色	-	内外面の調整はナデ 肩部に梅花状のスタンプ	-	瓦買	
13号溝62	湯釜	□19 選注 16.6 色高	灰色～黒色	-	内外面の調整はハケメ 部分的に仕肌あり	-	瓦買	
13号溝63	湯釜	□19 選注 24.8 色高	黒色～黒灰色	-	外面の調整はハケメ 内面の調整はナデ肩部に穿孔あり	-	瓦買	
13号溝64	湯釜	□19 選注 17.2 色高	黒灰色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ肩部に花状のスタンプ	-	瓦買	
13号溝65	湯釜	□19 選注 16.6 色高	こげ茶色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	瓦買	
13号溝66	湯釜	□19 選注 16.0 色高	黒灰色	-	内外面の調整はハケメ 肩部に穿孔あり	-	瓦買	
13号溝67	湯釜	□19 選注 16.0 色高	こげ茶色	-	肩部に花文のスタンプあり	-	瓦買	
13号溝68	湯釜	□19 選注 19.8 色高	灰色	-	肩部に沈線と弧文あり	-	瓦買	
13号溝69	湯釜	□19 選注 色高	暗黄褐色	-	外面の調整はハケメ 外面にはスガが付着	-	瓦買	
13号溝70	火鉢	□19 選注 30.8 色高	暗灰黄褐色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内外面はナデ調整	-	土師質	
13号溝71	火鉢	□19 選注 色高	暗灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内面はハケメ調整	-	瓦買	
13号溝72	火鉢	□19 選注 色高	暗灰色～黒灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内面はハケメ調整	-	瓦買	
13号溝73	火鉢	□19 選注 色高	暗灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内面はハケメ調整	-	瓦買	
13号溝74	火鉢	□19 選注 色高	暗灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内面はハケメ調整	-	瓦買	
13号溝75	火鉢	□19 選注 26.6 色高	暗灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内外面はナデ調整	-	瓦買	
13号溝76	火鉢	□19 選注 25.6 色高	暗灰色	-	外面に変帯と花文のスタンプ 内外面はナデ調整	-	瓦買	
15号溝 1	襦袢 組	□19 選注 4.8 色高	灰色	暗緑色	高台内は露胎	-		
15号溝 2	裏 胸袋	□19 選注 14.7 選注 11.9 色高 3.9	白灰色	白灰色	登付部分は露胎	見込に4ヶ所 目録		17世紀

15号講3	黒陶器	口径15.0 底径5.1 高さ11.0	白灰色	白灰色	置付部分は露胎	見込に3か所 目跡			17世紀
15号講4	黒陶器	口径10.7 底径3.9 高さ6.3	灰色	暗緑色	底部付近露胎	-			
15号講5	黒陶器	口径11.3 底径4.0 高さ6.5	灰色～灰黄褐色	灰黄緑色	底部付近露胎	見込に4か所 目跡			
15号講6	黒陶器	口径11.4 底径4.0 高さ6.5	白黄褐色	灰黄褐色	底部付近露胎				
15号講7	黒陶器	口径10.8 底径3.6 高さ6.6	淡黄褐色	灰色	高台部分は切り離し後、ナデ 底部付近露胎				
15号講8	黒陶器	口径12.2 底径4.4 高さ6.2	黄褐色	灰黄色	底部付近露胎				
15号講9	黒磁器	口径 底径5.6 高さ	白灰色	白緑灰色	見込に文様を描く	置付は露胎			
15号講10	天目	口径11.0 底径7.0 高さ	灰色	淡黄褐色	底部付近露胎			瀬戸産か?	
15号講11	天目	口径11.6 底径4.2 高さ6.7	灰黄色	こげ茶色	底部付近露胎			瀬戸産か?	
15号講12	茶碗	口径14.0 底径7.0 高さ	暗茶褐色	こげ茶色	口縁上縁面に目跡あり				
15号講13	茶碗	口径15.7 底径13.5 高さ10.0	暗茶褐色	こげ茶色	外面はタタキ、内面はナデ				
15号講14	茶碗	口径12.8 底径4.0 高さ	灰色	灰黄緑色	内外面はナデ調整	置付は露胎		高取系	
15号講15	茶碗	口径10.0 底径3.7 高さ	灰色	黒褐色	底部は糸切り	底部は露胎			
15号講16	茶碗	口径10.4 底径	茶褐色	こげ茶色	内外面の調整はナデ内面に9本単位の目目	-		肥前系	17世紀
16号講1	小皿 かわらけ	口径7.6 底径	灰白色	-	内外面の調整はナデ	-			
16号講2	小皿 かわらけ	口径5.2 底径	灰白色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-			
16号講3	小皿 かわらけ	口径5.3 底径	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-			
16号講4	小皿 かわらけ	口径5.6 底径	灰黄色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-			
16号講5	杯 かわらけ	口径5.6 底径	淡褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-			
16号講6	杯 かわらけ	口径11.0 底径	茶褐色～こげ 茶色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-			
16号講7	横青磁	口径11.0 底径11.0 高さ	灰色	灰緑色	外面に簡略化した蓮弁文が描かれる	-		中国産	
16号講8	横青磁	口径11.0 底径11.0 高さ	灰色	暗緑色	外面に簡略化した蓮弁文が描かれる	-		中国産	
16号講9	横青磁	口径12.0 底径12.0 高さ	明灰色	灰緑白色	外面に簡略化した蓮弁文が描かれる	-		中国産	
16号講10	横青磁	口径5.2 底径5.2 高さ	灰色	灰緑色	見込に文様が描かれる	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講11	横青磁	口径12.2 底径5.1 高さ5.0	灰色	淡緑色の透明釉	見込に花文が描かれる	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講12	横青磁	口径5.4 底径5.4 高さ	灰色	灰緑色	見込に花文が描かれる	高台内露胎		中国産	
16号講13	横青磁	口径4.7 底径4.7 高さ	灰黄色	青緑色	-	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講14	横青磁	口径5.4 底径5.4 高さ	灰色	灰色	-	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講15	横青磁	口径3.8 底径3.8 高さ	明灰色	白緑色	見込に花文が描かれる	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講16	横青磁	口径5.4 底径5.4 高さ	明灰色	灰色	-	置付～高台内 露胎		中国産	
16号講17	横白磁	口径6.2 底径6.2 高さ	灰色	白灰色	底部付近露胎	-		中国産	
16号講18	横青花	口径3.6 底径3.6 高さ	白灰色	黄灰白色	外面に文様が描かれる	全面に施釉			
16号講19	横鉢	口径31.0 底径12.0 高さ	灰色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ、4本単位の目目	-		瓦買	
16号講20	横鉢	口径12.5 底径12.5 高さ	黒色～灰黄色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ、7本単位の目目	-		瓦買	
16号講21	横鉢	口径11.3 底径11.3 高さ	灰黄色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ、4本単位の目目	-		瓦買	
16号講22	横鉢	口径32.0 底径12.0 高さ	青灰色	-	外面は格子タタキ 内面の調整はナデ	-		瓦買	
16号講23	横鉢	口径28.0 底径12.0 高さ	明灰色～青灰 色	-	内外面の調整はナデ 外面に菱形の連続文	-		瓦買	
16号講24	横鉢	口径11.0 底径11.0 高さ	淡褐色	-	外面は花文のスタンプ	-		瓦買	

16号講25	大鉢	口径 直径 高さ	灰色	-	外面はスタンプ文 内面はハケメ	-	瓦質	
19号講1	小皿 かわらけ	口径6.2 直径5.0 高さ1.0	灰黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講2	小皿 かわらけ	口径 直径6.3 高さ	灰黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講3	小皿 かわらけ	口径7.2 直径4.4 高さ2.3	白黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講4	小皿 かわらけ	口径7.8 直径4.6 高さ1.4	白黄褐色	-	内外面の調整はナゲ	-		
19号講5	小皿 かわらけ	口径9.0 直径5.0 高さ1.9	白黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講6	小皿 かわらけ	口径9.0 直径5.0 高さ2.2	白黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講7	小皿 かわらけ	口径9.0 直径5.0 高さ1.7	白黄色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講8	小皿 かわらけ	口径9.0 直径5.0 高さ1.9	白黄色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講9	小皿 かわらけ	口径10.0 直径6.0 高さ2.1	橙褐色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講10	小皿 かわらけ	口径 直径7.0 高さ	灰黄色	-	内外面の調整はナゲ 底部は糸切り	-		
19号講11	杯 かわらけ	口径12.2 直径3.4	灰黄色	-	内外面の調整はナゲ	-		
19号講12	楕圓 瓶	口径 直径6.0 高さ	灰色	緑灰色	見込に文様あり		高台内露胎	
19号講13	楕圓 瓶	口径 直径6.6 高さ	灰色	淡緑灰色	見込に花文あり		高台内露胎	
19号講14	黒細器	口径 直径6.6 高さ	灰白色	灰青白色	見込に「福」の文字あり	全面に施軸	高台内に黒書あり	
19号講15	黒細器	口径9.9 直径2.1	白黄褐色	灰白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講16	黒細器	口径9.0 直径3.8 高さ2.3	白黄褐色	灰白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講17	黒細器	口径9.8 直径2.2 高さ2.2	白色	灰白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講18	黒細器	口径9.1 直径4.2 高さ2.2	白色	白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講19	黒細器	口径9.4 直径4.8 高さ2.2	白色	灰白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講20	黒細器	口径10.6 直径4.8 高さ2.2	白色	灰白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付一高台内露胎		
19号講21	黒細器	口径8.4 直径3.4 高さ2.2	灰色	灰白色	隅丸方形に仕上げる	畳付部分は露胎		
19号講22	黒細器	口径8.6 直径3.2 高さ2.2	白色	白色の透明軸	口縁を波状に仕上げる	見込に3か所目掛		
19号講23	黒細器	口径12.2 直径7.7 高さ2.5	灰白色	青白色	口縁を波状に仕上げる	-		
19号講24	黒細器	口径 直径4.3 高さ	黄褐色	淡黄褐色	見込に花文が描かれる	畳付一高台内露胎		
19号講25	杯 細器	口径8.6 直径3.6 高さ2.8	白色	灰白色の透明軸	-	畳付部分は露胎		
19号講26	茶 碗	口径9.1 直径3.7 高さ2.9	灰黄褐色	暗茶色	底面は糸切り	-		
19号講27	楕圓 細器	口径9.5 直径3.9 高さ2.7	灰白色	淡白色	蛇ノ目輪割ぎ	畳付部分は露胎		
19号講28	楕圓 細器	口径6.8 直径4.0 高さ1.1	白色	灰白色	-	畳付部分は露胎		
19号講29	楕圓 細器	口径7.9 直径3.0 高さ2.9	白色	白色	-	全面に施軸		
19号講30	ひょうそく 陶器	口径16.0 直径12.3	茶褐色	黒褐色	内外面の調整はナゲ	-		
19号講31	薬 陶器	口径 直径12.0 高さ	淡褐色	こげ茶色	内外面の調整はナゲ	底部付近は露胎		
19号講32	楕圓 陶器	口径 直径 高さ	茶褐色	こげ茶色	内外面の調整はナゲ 密に目掛	-		
19号講33	楕圓 陶器	口径30.2 直径14.0 高さ12.5	灰色	-	内外面の調整はナゲ 8本単位の目掛	-	瓦質	
19号講34	楕圓 陶器	口径 直径 高さ	灰黄褐色	-	内外面の調整はナゲ 4本単位の目掛	-	瓦質	
19号講35	楕圓 陶器	口径 直径 高さ	灰色	-	内外面の調整はナゲ 7本単位の目掛	-	瓦質	
19号講36	楕圓？ 陶器	口径 直径 高さ	灰色	-	外面の調整はハケメ 内面には内弧の目掛？	-	瓦質	
19号講37	湯 盆	口径14.0 直径 高さ	灰色	-	内外面の調整はナゲ 外面に沈線とスタンプ文	-	瓦質	

19号講38	湯釜	□1915.3 裏付け 器高	灰褐色	-	内外面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講39	湯釜	□19 裏付け 器高	灰色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-	瓦質	
19号講40	鑊	□1924.0 裏付け 器高	灰色	-	外面の調整はタタキ 内面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講41	火鉢	□19 裏付け 器高	灰色	-	外面はナデ、箱み 内面の調整はハケメ	-	瓦質	
19号講42	火鉢	□19 裏付け 器高	灰色	-	外面は変帯とスタンプ文 内面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講43	火鉢	□1933.8 裏付け 器高	暗灰青褐色	-	外面は変帯とスタンプ文 内面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講44	火鉢	□19 裏付け 器高	灰色	-	外面は変帯とスタンプ文 内面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講45	火鉢	□19 裏付け30.2 器高	灰青褐色	-	内外面の調整はハケメ	-	瓦質	
19号講46	火鉢?	□19 裏付け19.0 器高	淡灰色	-	内外面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講47	火鉢?	□19 裏付け15.7 器高	灰黄色	-	内外面の調整はナデ	-	瓦質	
19号講48	土鍋	□1932.8 裏付け 器高	灰青褐色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-		肥前系
19号講49	土鍋	□1949.0 裏付け 器高	黒灰色	-	内外面の調整はハケメ	-		肥前系
19号講50	土鍋	□1948.0 裏付け 器高	黒色～灰黄色	-	内外面の調整はハケメ	-		外面にスガが 付着
19号講51	土鍋	□1950.0 裏付け36.0 器高8.0	黒色～白黄褐色	-	外面の調整はナデ 内面の調整はハケメ	-		外面にスガが 付着
19号講52	土鍋	□1953.0 裏付け 器高	灰色	-	内外面の調整はハケメ	-		
ビット1	小皿 かわらけ	□196.0 裏付け4.3 器高1.6	灰青褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
ビット2	小皿 かわらけ	□196.5 裏付け5.0 器高2.0	黄褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
ビット3	小皿 かわらけ	□19 裏付け16.7 器高	白黄褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
ビット4	杯 かわらけ	□1914.0 裏付け10.0 器高2.3	淡橙褐色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		
ビット5	かわらけ	□196.0 裏付け 器高	白橙褐色	-	内外面の調整はナデ	-		
ビット6	土鍋	□19 裏付け 器高	こげ茶色	-	内外面の調整はナデ	-		外面にスガが 付着
表採7	控鉢	□1921.0 裏付け 器高	灰色	-	内外面の調整はナデ	-		東播系
表採8	控鉢	□1922.0 裏付け 器高	灰色～暗灰色	-	内外面の調整はナデ	-		東播系
表採9	控鉢	□19 裏付け16.9 器高	灰色	-	内外面の調整はナデ 底部は糸切り	-		東播系
表採10	筒青磁	□19 裏付け15.6 器高	灰色	濃緑白色	外面は筋走弁		置付部分的に 露胎	中国
表採11	質磁器	□1914.0 裏付け7.8 器高4.4	白灰色	青白灰色	-		置付部分にも 露胎	
表採12	瓶 ガラス	□191.7 裏付け5.6 器高11.0	透明	-	口縁はネジ式 胴部と底部の3つを合わせる	-		気泡が残る
表採13	壺 ガラス 行燈	□191.5 裏付け2.9 器高6.2	青色	-	表「九州日報」 裏「九州製業株式会社」	-		九州 近代

第3表 矢加部五反田遺跡出土土器

遺構名 採出番号 図記番号	器種 形状 通称名	法量(cm) ()は 復元値	胎の特徴 ()は 胎の特徴	釉薬	調整・整形・装飾技法	窯話技法	所見		
							特記事項	産定産地	産定年代
1号溝 1	小皿 かわらけ	口径6.7 底径4.2 器高2.2	灰褐色～茶色 細砂粒を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝 2	小皿 かわらけ	口径6.8 底径4.1 器高2.2	白黄色 細砂粒を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切りか?	-			
1号溝 3	小皿 かわらけ	口径6.8 底径4.1 器高2.0	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝 4	小皿 かわらけ	口径6.6 底径4.0 器高2.0	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整	-			
1号溝 5	小皿 かわらけ	口径9.8 底径6.0 器高2.0	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整	-			
1号溝 6	小皿 かわらけ	口径9.2 底径6.0 器高2.8	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝 7	小皿 かわらけ	口径9.3 底径5.4 器高2.8	白黄色 1mmの砂粒を 含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝 8	小皿 かわらけ	口径9.4 底径7.2 器高1.8	白黄色 細砂粒を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝 9	杯 かわらけ	口径14.4 底径10.0 器高4.4	こげ茶色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整 底部は糸切り	-			
1号溝10	小皿 かわらけ	口径 底径6.0 器高	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面はナデ調整	-			
1号溝11	磁 甌	口径 底径5.2 器高	暗灰色	淡緑色の透明釉	外面は錆差弁 見込に花文様	-	登付は露胎	中国産	13世紀代
1号溝12	磁 甌 菓子鉢	口径 底径3.9 器高	白灰色	白色の透明釉	外面に芭蕉文 内面にも文様が描かれる	-	登付は露胎	中国産	15世紀
1号溝13	磁 甌	口径 底径3.0 器高	白灰色	白色の透明釉	器間定 外面に芭蕉文見込に枝に止まる鳥	-	登付は露胎	中国産	
1号溝14	磁 甌	口径10.3 底径5.4 器高2.4	白色	白色の透明釉	見込に植物文 高台内に此あり	砂目	登付は露胎	中国産	
1号溝15	湯 釜	口径14.6 底径10.0 器高6.0	灰褐色 1mmの砂粒を 含む	-	外面上縁はミガキ 外面底部及び内面はハケメ	-			外面にスガが 付着
1号溝16	湯 釜	口径17.0	こげ茶色 1-3mmの砂粒 を含む	-	外面はナデ 前面に花文のスタンプ内面口縁付近ハケメ	-			瓦貫
1号溝17	火鉢	不明	灰色 1-3mmの砂粒 を含む	-	外面はナデ 1条の沈線が走る内面はハケメ	-			瓦貫
1号溝18	火鉢	不明	灰色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面ナデ 調整外面に2条の変帯が走る	-			瓦貫
1号溝19	磁鉢	口径27.0 底径15.0 器高12.0	灰色 1mmの砂粒を 含む	-	外面はナデ 調整内面は7本単位の溝が目 が交差して描される	-			瓦貫
1号溝20	不明	口径12.8 底径 器高2.5	灰色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面ナデ調整	-			瓦貫天地不明
1号溝21	不明	口径20.8 底径 器高2.3	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面ナデ調整	-			天地不明
1号溝22	控鉢	口径22.6 底径15.5 器高12.5	黄栗褐色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面粗いハケメ	-			瓦貫
1号溝23	控鉢	口径27.6 底径 器高	灰色 1mmの砂粒を 含む	-	内外面ハケメ	-			瓦貫
1号溝24	土鍋	口径47.0 底径 器高	黒色 暗灰色白 灰色	-	外面ハケメ調整 内面ナデ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝25	土鍋	口径 底径 器高	黒色 灰色	-	内外面ともにハケメ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝26	土鍋	口径 底径 器高	黒色 灰色	-	内外面ともにハケメ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝27	土鍋	口径 底径 器高	白黄色 1-3mmの砂粒 を含む	-	内外面ともにハケメ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝28	土鍋	口径 底径 器高	黄栗褐色 1-3mmの砂粒 を含む	-	玉縁口縁内外面ともにナデ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝29	土鍋	口径 底径 器高	黄栗褐色 1-3mmの砂粒 を含む	-	玉縁口縁内外面ともにナデ調整	-			外面にスガが 付着
1号溝30	耳罎	口径 底径 器高	黒灰色 1-3mmの砂粒 を含む	-	2ヶ所の穿孔孔の外面下部に耳が付く	-			外面にスガが 付着
2号溝 1	小皿 かわらけ	口径6.4 底径4.4 器高	白黄色 細砂粒を含む	-	内外面ともにナデ調整	-			
2号溝 2	小皿 かわらけ	口径6.4 底径4.6 器高1.6	白黄色 赤褐色粒 を含む	-	内外面ともにナデ調整 底部は糸切り	-			
2号溝 3	小皿 かわらけ	口径 底径2.2 器高	黄灰色 細砂粒を含む	-	底部は糸切りで、板状圧痕が残る	-			
2号溝 4	小皿 かわらけ	口径 底径5.4 器高	白黄色 赤色粒を含む	-	内外面ともにナデ調整 底部は糸切り	-			

2号講5	杯かわらけ	口徑 底径 高さ 10.0 15.8 10.0	黄灰色 赤色紋を含む	-	内外面ともに十字調整 底部は糸切り	-		
2号講6	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	灰黄褐色	灰黄緑色の透明釉	見込部分は露胎 高白内は施釉残ケズリ	-	中国産	
2号講7	襷青磁	口徑 底径 高さ 114.4 114.4 11.6	灰色	緑色の透明釉	見込に濃緑色で花文が描かれる	畳付のみ露胎	中国産	
2号講8	置青花	口徑 底径 高さ 11.6 11.6 4.8	白色	やや濁る白色釉	帯筒文 外面に芭蕉文見込に花文	畳付の下位から 露胎	中国産	
2号講9	天目茶碗	口徑 底径 高さ 11.2 4.1 5.6	褐色	黒褐色	高台部分は顔り出し	襷目下位から 露胎	瀬戸産か	
2号講10	大皿 青花	口徑 底径 高さ 200 180 20	白色	淡青色の透明釉	内外面に草花文が描かれる。	畳付のみ露胎		
2号講11	火鉢	口徑 底径 高さ 80.0 70.0 10.0	灰青色 細砂粒を含む	-	外面に3条の沈線 草文のスタンプ?	-	瓦買	
2号講12	火鉢	口徑 底径 高さ 80.0 70.0 10.0	灰色 細砂粒を含む	-	外面に3条の沈線 内面の調整はハケメ	-	瓦買	
2号講13	湯釜	口徑 底径 高さ 115.0 100.0 15.0	黒灰色 細砂粒を含む	-	外面に雲文のスタンプ 内面はハケメ	-	瓦買	
2号講14	湯釜	口徑 底径 高さ 115.0 100.0 15.0	灰黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	瓦買	
2号講15	燗鉢	口徑 底径 高さ 14.0 14.0 1.0	灰青色 白色細砂粒を 含む	-	外面は強いナデ 内面の目目は密に施される	-	瓦買	
2号講16	燗鉢	口徑 底径 高さ 18.0 18.0 1.0	黒灰色 灰白色	-	内面に不定方向の耀目	-	瓦買	
2号講17	燗鉢	口徑 底径 高さ 12.4 12.4 1.0	灰色～茶灰色	-	内面に耀目が弱く施される。	-	瓦買	
2号講18	土鍋	口徑 底径 高さ 28.0 28.0 2.0	灰色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講19	土鍋	口徑 底径 高さ 28.0 28.0 2.0	黒灰色	-	内外面の調整はハケメ	-		
2号講20	土鍋	口徑 底径 高さ 32.0 32.0 2.0	灰色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講21	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰色～白灰色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講22	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰色～黒色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講23	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰黄褐色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講24	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰黄茶褐色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講25	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
2号講26	土鍋	口徑 底径 高さ 49.0 49.0 2.0	灰色～暗灰色	-	内外面の調整はハケメ	-	外面にススが 付着	
3号講1	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 5.1 5.0 0.2	白青色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整 底部は糸切り	-		
3号講2	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 5.6 5.4 0.1	灰黄褐色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整 底部は糸切り	-		
3号講3	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 5.8 5.7 0.1	黄褐色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整	-		
3号講4	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 6.4 6.0 0.2	暗灰色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整 底部は糸切り	-		
3号講5	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 6.2 6.2 0.1	白青色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整 底部は糸切り	-		
3号講6	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 6.8 6.8 0.2	白黄茶色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整 底部は糸切り	-		
3号講7	小皿 かわらけ	口徑 底径 高さ 6.0 6.0 0.1	黄茶褐色 細砂粒を含む	-	内外面は十字調整	-		
3号講8	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	白灰色	淡緑色	外面に磨略された 蓮弁文を施す	-	中国産	
3号講9	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	白灰色	白緑色	外面に蓮弁らしき文様が見えるが不明	-	釉薬の発色が 悪い	中国産
3号講10	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	灰色	灰緑色の透明釉	外面に文様あり	-	畳付は部分的 に露胎	中国産
3号講11	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	灰色	灰黄緑色	-	-	畳付は部分的 に露胎	中国産
3号講12	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	白灰色	灰緑色の透明釉	外面に蓮弁文あり	-	中国産	
3号講13	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	白灰色	灰黄緑色	見込に文様あり	-	中国産	
3号講14	襷青磁	口徑 底径 高さ 115.8 114.4 11.6	淡赤褐色	灰黄緑色	見込に文様あり	-	畳付にも施釉 される	中国産
3号講15	置青花	口徑 底径 高さ 11.6 11.6 4.8	乳白色	淡青色の透明釉	外面に芭蕉文	-	中国産	
3号講16	置白磁	口徑 底径 高さ 11.6 11.6 4.8	白色	灰白色の透明釉	-	砂目		

3号溝17	黒白磁	□口径16.0 底径12.0 器高1.0	灰色	淡赤白色	-	-	濃緑色	
3号溝18	黒白磁	□口径13.7 底径9.0 器高0.9	灰白色	灰白色	胴部で屈曲する	-	濃緑色	
3号溝19	黒陶器	□口径13.7 底径9.0 器高0.9	赤褐色	白灰色の不透明釉	登付は露胎	-	濃緑色	
3号溝20	黒陶器	□口径11.2 底径7.4 器高0.8	灰黄色	灰白色	高台部分は開り出し	見込に4箇所の目跡	-	
3号溝21	黒陶器	□口径11.2 底径7.4 器高0.8	赤褐色	暗緑色	高台内を彫り込んで高台をつくる	-	-	
3号溝22	黒陶器	□口径11.2 底径7.4 器高0.8	淡赤褐色	淡緑色	高台部分は開り出し	見込に4箇所の目跡	-	
3号溝23	黒陶器	□口径11.2 底径7.4 器高0.8	赤褐色	暗緑色灰白色	灰白色の輪線をハケメ状に施す	見込に目跡あり	-	
3号溝24	黒陶器	□口径21.4 底径12.8 器高2.8	淡黄茶色	灰色	高台部分は開り出し	-	-	17世紀前半
3号溝25	火鉢	□口径25.0 底径15.0 器高	桃褐色	-	外面は粗いハケメ 内面は横方向のハケメ	瓦質	-	
3号溝26	火鉢	□口径25.0 底径15.0 器高	灰黒色	-	外面に2条の縦突帯 内面は横方向のハケメ	瓦質	-	
3号溝27	湯釜	□口径15.6 底径9.0 器高	黄褐色～黒色	-	外面に花文のスタンプ 内面の調整はハケメ	瓦質	-	
3号溝28	湯釜	□口径15.6 底径9.0 器高	淡黒褐色	-	内外面ともにハケメ調整	瓦質	外面にススが付着	
3号溝29	湯釜	□口径15.6 底径9.0 器高	淡黒褐色	-	外面肩部に花文のスタンプ 内面は横方向のハケメ	瓦質	-	
3号溝30	磁鉢陶器	□口径15.6 底径9.0 器高	淡赤褐色	こげ茶色の輪線	全体の調整はナデ	-	-	
3号溝31	磁鉢陶器	□口径10.0 底径6.0 器高	淡赤黄褐色	-	全体の調整はナデ 13本単位の掻目	-	-	胴部が彫らむ
3号溝32	磁鉢	□口径10.0 底径6.0 器高	暗灰色	-	内外面ナデ調整 内面に粗く掻目が施される	瓦質	-	
3号溝33	磁鉢	□口径10.0 底径6.0 器高	暗灰色～黒色	-	内外面ともハケメ 調整内面に粗く掻目が施される	瓦質	-	
3号溝34	磁鉢	□口径10.0 底径6.0 器高	灰色～黒色	-	内外面ともにハケメ内面に掻目が交差してつけられる	瓦質	-	
3号溝35	磁鉢	□口径10.0 底径6.0 器高	暗青灰色	-	内外面ともにナデ調整 内面に粗い掻目が施される	瓦質	-	
3号溝36	磁鉢	□口径10.0 底径6.0 器高	黒灰色	-	内外面ともにナデ調整 内面に粗い掻目が施される	瓦質	-	
3号溝37	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	灰色～黒灰色	-	外面は縦方向のハケメ後、部分的にナデ 内面は横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝38	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	灰色～黒色	-	外面は縦方向のハケメ後、部分的にナデ 内面は横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝39	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	灰黒色	-	内外面ともに横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝40	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黒色	-	内外面ともに横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝41	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	灰色～黒褐色	-	外面は縦方向のハケメ後、部分的にナデ 内面は横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝42	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄灰色～黒灰色	-	外面は斜め方向のハケメ 内面は横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝43	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	淡赤褐色～こげ茶色～黒色	-	内外面ともに横方向のハケメ	-	外面にススが付着	
3号溝44	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄褐色	-	外面はナデ調整内面は横方向のハケメ	-	外面にススが付着	肥前系
3号溝45	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄褐色～黒色	-	内外面ともにナデ調整	-	外面にススが付着	肥前系
3号溝46	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄茶褐色	-	内外面ともにナデ調整	-	-	肥前系
3号溝47	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄褐色～黄茶褐色	-	内外面ともにナデ調整	-	-	肥前系
3号溝48	土鍋	□口径10.0 底径6.0 器高	黄褐色	-	内外面ともにナデ調整	-	-	肥前系
4号溝1	陶質	□口径12.0 底径7.0 器高	淡赤茶色	淡緑色の透明釉	外面に文様あり	-	-	中国産
ビット1	小皿かわらけ	□口径4.4 底径1.8 器高	黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	-	内外面ともにナデ調整	-	-	
ビット2	小皿かわらけ	□口径4.4 底径1.8 器高	黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	-	内外面ともにナデ調整	-	-	
ビット3	杯かわらけ	□口径6.6 底径2.4 器高	白黄色 1～2mmの砂粒を含む	-	内外面ともにナデ調整	-	-	
ビット4	土鍋	□口径25.8 底径12.0 器高	白黄褐色 1～2mmの砂粒を含む	-	内外面ともにハケメ調整	-	外面にススが付着	
ビット5	白磁	□口径12.0 底径7.0 器高	砂粒をわずかに含む	白色の透明釉	ナデ調整	-	-	

第4表 矢加部南屋敷遺跡出土石製品

種目番号	種類	出土場所	長さ	幅・径	厚さ	重量	材質	備考
第34図1	宝篋印塔 相輪	13号溝	26.0	10.3	9.6	3370	凝灰岩	
第34図2	宝篋印塔 相輪	13号溝	14.1 + a	9.6	9.5	1520	凝灰岩	
第34図3	五輪塔 空風輪	1号溝	18.0 + a	13.0	-	1905	凝灰岩	
第34図4	五輪塔 空風輪	2号溝	21.1	14.5	-	3860	凝灰岩	
第34図5	五輪塔 空風輪	2号溝	22.0	15.6	12.2	3250	凝灰岩	
第34図6	五輪塔 空風輪	1号溝	14.5 + a	-	-	878	凝灰岩	
第34図7	五輪塔 空風輪	19号溝	12.8 + a	10.4	-	792	凝灰岩	
第34図8	五輪塔 火輪	7号溝	-	-	10.0	1112	凝灰岩	
第34図9	宝篋印塔 笠	2号溝	-	-	15.1	1540	凝灰岩	
第35図10	五輪塔 火輪	2号溝	-	-	14.3	1860	凝灰岩	
第35図11	五輪塔 火輪	13号溝	30.0	-	14.9	6600	凝灰岩	
第35図12	五輪塔 水輪	3号溝	-	27.2	15.8	9100	凝灰岩	
第35図13	五輪塔 水輪	11号溝	-	26.8	18.8	4280	凝灰岩	
第35図14	五輪塔 水輪	2号溝	-	-	-	250	凝灰岩	
第36図15	五輪塔 水輪	2号溝	-	22.6	-	780	凝灰岩	
第36図16	五輪塔 水輪	3号溝	-	21.8	-	1091	凝灰岩	
第36図17	五輪塔 水輪	2号溝	-	-	-	760	凝灰岩	
第36図18	五輪塔 地輪	2号溝	-	-	-	840	凝灰岩	
第36図19	砥石	4号溝	14.4	12.0	5.9	1963	片岩	
第36図20	砥石	19号溝	17.4	9.0	5.5	1297	片岩	
第37図21	上白	13号溝	-	-	5.3	4880	凝灰岩	
第37図22	上白	13号溝	-	31.2	10.7	7300	凝灰岩	
第37図23	下白	13号溝	-	-	8.0	2600	凝灰岩	
第37図24	下白	9号土坑	-	-	-	1300	凝灰岩	
第38図1	洪武通寶	表探	-	2.4	1.0	-	青銅	1368年初鋳
第38図2	朝鮮通寶	13号溝	-	2.4	1.0	-	青銅	1423年初鋳
第38図3	寛永通寶	遺構面	-	2.1	1.0	-	青銅	古寛永
第38図4	寛永通寶	表探	-	2.3	1.0	-	青銅	古寛永
第38図5	銭	表探	-	-	1.0	-	青銅	
第38図6	刀子	13号溝	8.0	1.3	0.6	-	鉄・青銅	
第38図7	刀子	13号溝	-	-	-	-	鉄	
第38図8	土人形	19号溝	5.7	3.1	1.2	-	土製	
第38図9	土鈴	表探	3.1	2.2	1.9	-	土製	
第38図10	土鈴	2号溝	4.2	3.1	3.2	-	土製	
第38図11	土製笛	19号溝	8.9	3.3	3.3	-	土製	
第38図12	石庵丁	13号溝	7.8	4.0	0.6	-	頁岩	
第38図13	砥石	13号溝	5.0	4.5	1.7	-	片岩	
第38図14	砥石	8号溝	7.2	3.5	3.9	-	砂岩	
第38図15	石鏡	13号溝	-	-	-	-	滑石	
第38図16	石鏡	12号溝	-	-	-	-	滑石	
第38図17	石鏡	11号溝	-	-	-	-	滑石	
第38図18	石鏡	13号溝	-	-	-	-	滑石	
第38図19	石鏡	12号溝	-	31.0	-	-	滑石	

第5表 矢加部五反田遺跡出土石製品

種目番号	種類	出土場所	長さ	幅・径	厚さ	重量	材質	備考
第49図1	宝篋印塔相輪	1号溝	18.8 + a	10.0	-	1657	凝灰岩	
第49図2	宝篋印塔相輪	1号溝	15.7 + a	9.8	9.4	2370	凝灰岩	
第49図3	上白	1号溝	-	-	8.4	1056	凝灰岩	
第49図4	上白	2号溝	-	-	7.6	459	凝灰岩	
第49図5	下白	1号溝	-	-	6.4	946	凝灰岩	
第49図6	下白	1号溝	-	-	4.9	1314	凝灰岩	
第49図7	下白	2号溝	-	-	-	270	凝灰岩	
第49図8	下白	1号溝	-	-	-	-	凝灰岩	
第49図9	下白	1号溝	-	-	-	209	凝灰岩	
第50図1	洪武通寶	3号溝	-	2.3	0.5	-	青銅	
第50図2	銭	3号溝	-	2.5	0.2	-	青銅	
第50図3	土鈴	1号溝	3.6	2.9	-	-	土製	
第50図4	土鈴	3号溝	3.9	3.2	-	-	土製	
第50図5	土鈴	1号溝	3.6	2.8	-	-	土製	
第50図6	土鈴	2号溝	3.3	2.7	-	-	土製	
第50図7	土鈴	3号溝	2.2	2.6	-	-	土製	
第50図8	土鈴	1号溝	4.5	-	-	-	土製	

圖 版



1 矢加部南屋敷遺跡
遠景（西から）



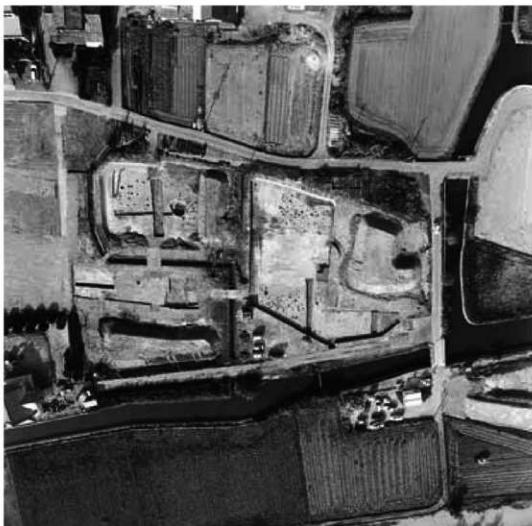
2 矢加部南屋敷遺跡
（空中写真）



1 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



2 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



1 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



2 矢加部南屋敷遺跡
遠景 (南東から)



1 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



2 矢加部南屋敷遺跡
遠景 (東から)



1 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



2 矢加部南屋敷遺跡
(空中写真)



1 1号掘立柱建物（南から）



2 1号木棺墓木棺検出状況（東から）



3 1号木棺墓（東から）



1 1号土坑墓 (東から)



2 1号土坑 (南から)



3 2号土坑 (南から)



1 4号土坑 (東から)



2 5号土坑 (南から)



3 6号土坑 (北から)



1 7号土坑 (北から)



2 8号土坑 (東から)



3 9号土坑 (東から)



1 10号土坑 (北から)



2 11号土坑 (東から)



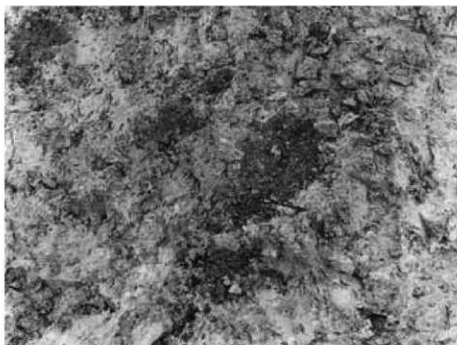
3 ビット土製鈴検出状況 (東から)



1 8号溝 (西から)



2 8号溝 (西から)



3 11号溝炭化米検出状況 (西から)



1 12号溝土層 (東から)



2 13号溝調査風景 (南から)



3 13号溝土層 (北から)



1 13号溝土層 (北から)



2 15号溝 (南東から)



3 16号溝土層 (北から)



1 16号溝土層 (南から)



2 16号溝土層 (南から)



3 19号溝 (西から)



1 遺跡全景 (東から)



2 遺跡全景 (南から)



3 遺跡全景 (東から)



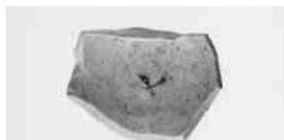
1 ビット群 (南から)



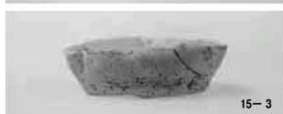
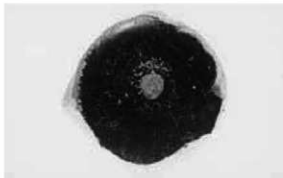
2 ビット群 (南から)



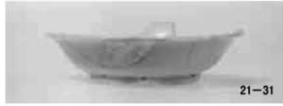
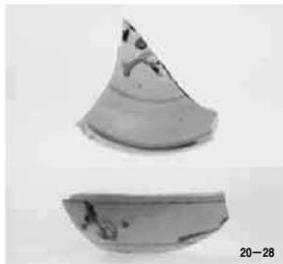
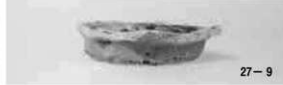
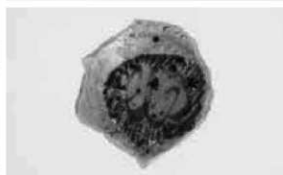
3 近くの堀 (北から)



1号木棺墓、4号土坑出土土器









27-10



27-14



27-15



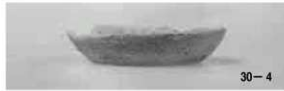
27-16



28-18



30-3



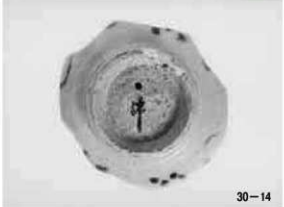
30-4



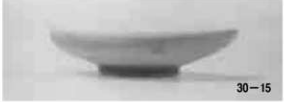
30-7



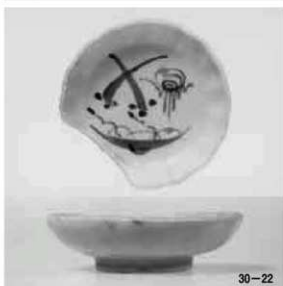
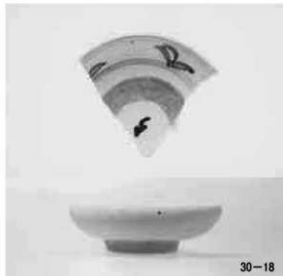
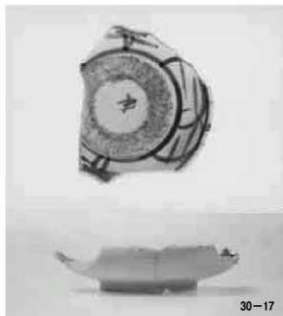
30-8

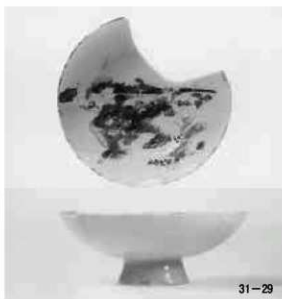


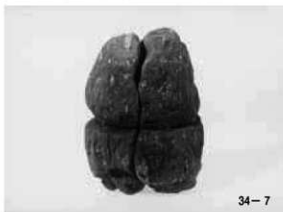
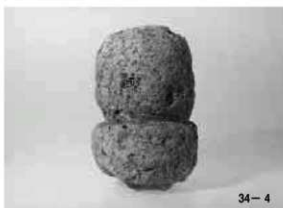
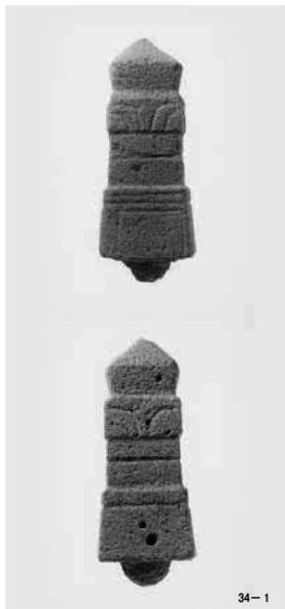
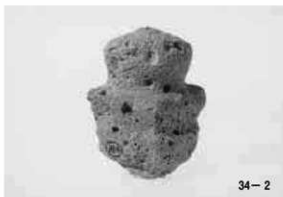
30-14



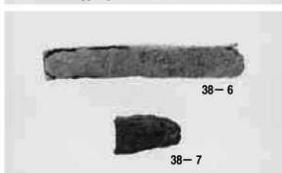
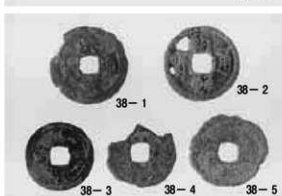
30-15







表採土器、出土石製品





1 矢加部五反田遺跡
遠景(南から)



2 矢加部五反田遺跡
遠景(西から)



1 矢加部五反田遺跡
全景(空中写真)



2 矢加部五反田遺跡
調査終了後(東から)



1 1号溝土層 (南から)



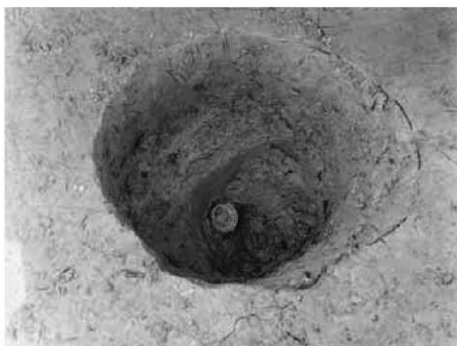
2 2号溝土層 (南から)



3 3号溝土層 (南から)



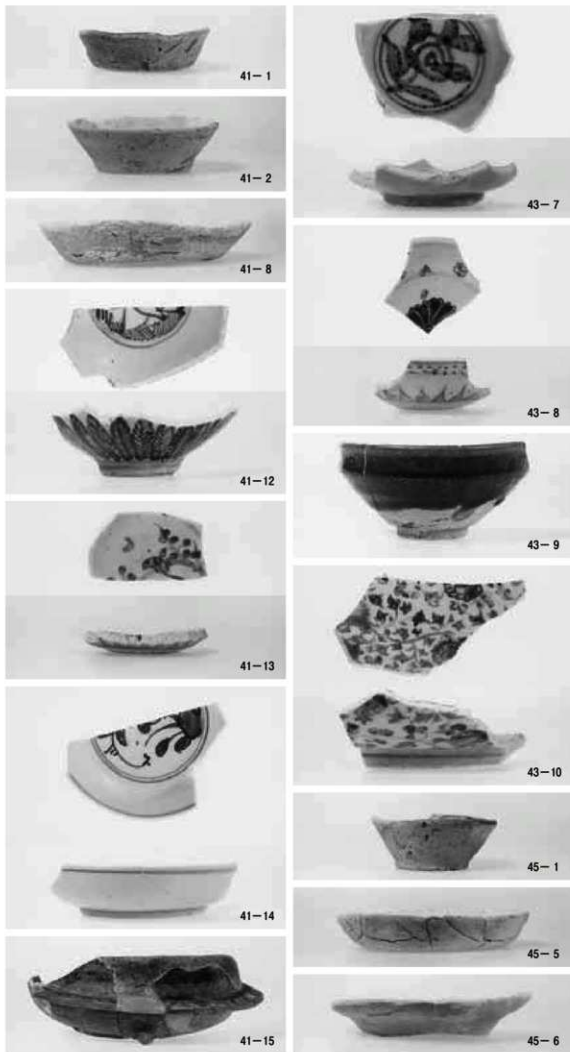
1 4号溝土層（北から）



2 ビット小皿出土状況（南から）



3 矢加部五反田遺跡調査終了後（東から）





報告書抄録

ふりがな	やかべみなみやしきいせき やかべごたんだいせき							
書名	矢加部南屋敷遺跡 矢加部五反田遺跡							
副書名	福岡県柳川市矢加部所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第5集							
編著者名	進村 真之							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7							
発行年月日	平成21（2009）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
矢加部 南屋敷遺跡	福岡県柳川市 大字矢加部	402079		33° 10' 43"	130° 25' 00"	20050719) 20060929	約 6,500㎡	有明海沿岸 道路大川バ イパス建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢加部 南屋敷遺跡	集落 墓地	中世	掘立柱建物 木棺墓 土坑墓 土坑 溝		土師器 瓦質土器 陶磁器 銭 石塔			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
矢加部 五反田遺跡	福岡県柳川市 大字矢加部	402079						
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
矢加部 五反田遺跡	集落	中世	溝 ビット		土師器 瓦質土器 陶磁器 銭			
遺跡の概要	矢加部南屋敷遺跡、矢加部五反田遺跡は標高約3mの微高地縁部に展開する一連の集落遺跡である。中世後期を中心とする掘立柱建物、木棺墓、土坑墓、土坑を検出している。また、この地域特有のクレーク（溝）を多く検出した。							

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 20	登録番号 4

有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

矢加部南屋敷遺跡 矢加部五反田遺跡

平成21(2009)年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡県博多区東公園7-7

印刷 株式会社印刷社
福岡市東区箱崎ふ頭6丁目6-45